

地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

DePOLA ^{でほら} 44

2014年



▼特集／人々が集って、はじめる
ふるさと再生作戦



人々が集って、はじめる — ふるさと再生作戦

●特集企画に寄せて



恵那市 / [奥矢作森林塾]で古民家リフォームをする塾生たち



浦河町 / 優駿ビレッジAERUの牧場でくつろぐ名馬たち



網走市 / 東京農大オホーツクキャンパスの図書館



日南町 / 農業研修1期生の農場を見学する後輩研修生



周防大島町 / 新しい品種の開発にも熱心な柑橘農家山本さん



大蔵村 / 肘折温泉で散策を楽しむ湯治客



西之表市 / 生姜栽培を復活した「なかわり生姜山農園」の看板と農場



牧丘町 / JUON「田畑の楽校」でぶどう農家の作業支援



奥多摩町 / JUON「森の楽校」で山仕事をするボランティア



伊達市月館町 / つきだて花工房野外ステージで遊ぶ子供たち

農業、森の間伐や草刈り作業を定期的に行うプロ級の腕をもつボランティア集団。田舎暮らしを肌で体験して移住をした幸せいっぱいの人たち。自然やそこに棲む動植物にふれ、特産品や地域のグルメを味わいに出かける中高年グループ。専門機関が行う研修会や塾等で地域ビジネスを学ぶ企業や起業をめざす人たち。農業体験などに通い地域の人や仲間と交流を深めるファミリー。

——今回、こんな人たちにたくさん出会った。

都市住民と地方で暮らす人たちとの交流や体験活動が増えてきている。これらは過疎化と高齢化に悩む地方からの発信・呼びかけで行われるものが多いが、最近では都市と地方の連携、交流を企画するNPO団体によって実施されるものも多く、参加希望者は確実に増えているという。

人口が減り人手不足に悩む農山漁村にとって、他所から大勢の人が来てくれることは、それだけでも一時的に活気が出るが、草刈りや農作業をしてくれるグループであれば大助かり。耕作放棄された農地に再生の手が入れば大地は生き生きと蘇り、その中から一組でも移住してくれる家族がいれば地域に活気が出て来る。

発信をはじめた地域では、活性化を担ってきた地元のリーダーたちに加えて、故郷へUターンしたり都市からIターンしてきた人たちの新たなアイデアが加わった。総務省の支援事業の一つ「地域おこし協力隊」の存在も大きい。

「こんなに素晴らしい田舎があるのに、ムラは疲弊して沢山の課題を抱えている。いま思いで何とかしなければ」と痛感した人々が住民に呼びかけ、皆で発信をはじめた。住民はムラに宝物が沢山あることを発見し、毎日が輝いてきた。

いまこそふるさとの再生に向けて人々が「集って、はじめる」こと。

「でぼら」44号では、そんな事例を紹介させていただいた。

特集「人々が集って、はじめる——ふるさと再生作戦」

●特集企画に寄せて——2



・「美味しい」の感動をつなぐ島

〔柑橘の里〕山口県周防大島町——4

・貴重な動植物と農業青年を育む里山

鳥取県日南町——8

・四ヶ村の棚田と肘折温泉で創る

ふるさとのにぎわい 山形県大蔵村——12

・主役は子供たち「交流館もりもり」でピザ焼き体験

福島県伊達市月舘町——16

・馬にふれ、馬たちの時間で暮らす

移住したい、「ちょっと暮らし」がしたい町

北海道浦河町——18

・ボランティアが続ける森や里山支援

JUON NETWORK 〔森の楽校〕〔田畑の楽校〕

東京都奥多摩町、山梨県山梨市牧丘町——22

・産学官でオホーツク地域産業の創成を

東京農業大学・オホーツク実学センター

北海道網走市——25



■平成25年度過疎地域自立活性化優良事例

「全国過疎地域自立促進連盟会長賞」受賞団体

・民家は地域資源、リフォームして定住促進へ

〔奥矢作森林塾〕岐阜県恵那市——28

・生姜栽培を復活して、開拓魂を受け継ぐ

〔なかわり生姜山農園〕鹿児島県西之表市——32

・アート・手作り品・イベントでおもてなし

〔雪浦ウイーク〕長崎県西海市——35

・地域の心を一つに、菜の花によるまちづくり

〔寄る会みなまた〕熊本県水俣市——36

・島は魅力溢れるイベント会場

〔若松ふるさと塾〕長崎県新上五島町——37

・“幻のそば”を食べに年間12万人が訪れる里山

〔会津山都そば協会〕福島県喜多方市——38

■ INFORMATION 39

新たに過疎地域に指定された市町村

平成25年度過疎地域自立活性化優良事例〔総務大臣賞〕受賞団体

「全国過疎問題シンポジウム2014 in みえ」のご案内

編集後記 奥付け

「でぼら」とは——

Depopulated Local Authorities (人口が減少した、つまり過疎化した地方自治体)からのネーミング。

過疎市町村の多くは山間地や離島など森林面積の多い農山漁村地区で、全般に人口の減少や高齢化が進んでいます。国土の保全・水源のかん養・地球の温暖化の防止などの多面的機能により、私たちの生活や経済活動に重要な役割を担っています。このような過疎地域は、豊かで貴重な自然環境に恵まれ、伝統文化や人情あふれる風土が数多く残っています。

多くの人たちが過疎地域を理解し、過疎地域と都市地域が交流をすすめ、共生していくためのホットラインとして、また過疎地域相互間の情報誌として「DePOLA」(でぼら)を発行しています。

●表紙写真

上/「ちょっと暮らし」で移住して乗馬を楽しむ松嶋夫妻(北海道浦河町)

左中/「交流館もりもり」でピザ作りに挑戦する子供たち(福島県伊達市月舘町)

左下/JUON NETWORK「森の楽校」に参加、奥多摩の山林で草刈りをするボランティアたち

右/4集落に点在する四ヶ村の棚田。地区民と保存会が保全に励み、肘折温泉と共に観光の目玉に(山形県大蔵村)



瀬戸内を望む海辺の瀟洒な店「瀬戸内ジャムズガーデン」。島で採れる糖度の高い柑橘類で手作りしたこだわりのジャムは年間120種以上。その美味しさと店のお洒落な雰囲気魅せられて遠くから客がやってくる。パリの街角で見た感動を日本で実現したいという都会育ちの青年の夢は、家族や地域の人々に支えられて実現、島にはU・タータンする若者が増えてきた。



瀬戸内ジャムズガーデンの前庭で。左から松嶋智明さん、白鳥文明さん、松嶋匡史さん

「美味しい」の感動をつなぐ島

すおうおしまちょう
 [柑橘の里] ●山口県周防大島町



▲開店と共に試食用のジャム20種が運ばれてきた



高齢化日本一は島民の誇りだった

農業も厨房仕事も体験したことのない京都生まれ、大学院卒業後は名古屋の電力会社に勤務していた松嶋匡史さん(42)。松嶋さんのジャム屋になるという無謀とも思える夢は、5年を経て、周防大島町東部、瀬戸内の穏やかな島々を望む日前海岸で実現した。「地域の価値を生かし地域に根ざしたビジネスをめざす」という松嶋さんの地域活性化への思いは全国から注目されるようになり、見学や講演の依頼が多い。その日も山口県の高校生が研修合宿をする場で松嶋さんが講演するというので、島へ行く前に、由宇青少年自然の家へ立ち寄った。

山口県高校農業クラブの幹部生徒51名を前に、松嶋さんは簡単に自己紹介した後、「周防大島町を知っていますか」と高校生たちに質問した。知っている、訪れたことがあると手を上げた生徒はほんの数人で、松嶋さんは苦笑しながら「周防大島町は数年前まで高齢化率日本一を誇っていました、各市町村の合併でその座を譲りました」とユーモアを交えて島について説明した。

周防大島町は旧4町が合併して現在人口約1万8000人。大島大橋の開通で山陽自動車道玖珂ICから30分、JR新岩国から1時間で来島できる。漁業に適したリアス式海岸が多いため漁業が盛んで、漁師の多くは一人船を操業して多品目の高級魚介類を水揚げしている。

▲上左から、棚に並ぶジャム各種／パンに塗って焼くと美味しい金時も等／アンズジャムの下拵え作業
 ▶山口県高校農業クラブの生徒に「地域のものに関心をもって欲しい」と講演する松嶋さん





◀東安下庄地区の山の中腹にある
柑橘畑からみた瀬戸内の風景

島の東南部は海辺から丘陵地が形成され、島の中央部は500m以上の山々が連なる。そのため昔から柑橘類の一大産地になっている。

以前来島した時「生涯現役、ここへ来れば誰もが若者さ」と80歳のタクシー運転手が言っていたが、島には過疎地の暗さは微塵もなく、住民は年取っても働けることを誇りにしている雰囲気があった。しかし他地域と同様に若者らの島離れで、ミカン畑の耕作放棄や空き家が増えてきた。

「加古」から蝶も集まる柑橘園

松嶋さんの講演のあと訪ねたのは周防大島町東部・東安下庄地区の山本柑橘園。

松嶋さんがジャムを造る上で数々のアドバイスを受け、甘くて新鮮な柑橘類を提供してもらっている柑橘農家でもある。園主の山本弘三さん(65)は、春から夏に収穫できるみかん「南津海」の開発者として知られ、海外からも視察者が訪れるほど。今では周防大島町の特産品になり、5、

6軒の農家が栽培をはじめめるようになった。自宅の前の道路で待っていてくれた山本さんは、作業場に隣接する柑橘園へ案内してくれた。入口にあるドンダリに似た一本の木を示して「この木はメキシコから取り寄せたミカンの苗木で、まだ実

をつけていませんが、珍しい蝶が飛んできて卵を産んだ。こうしてネットを張って孵化を楽しみにしているんです」と嬉しそうに語る。

この園では収穫最盛期をほぼ終えた南津海が栽培され、生い茂る葉の中に冬ミカンに似た形のミカンが実をつけている。早速戴いたが、果肉の密度が高くすこぶる濃厚な甘さで、糖度が高いせいか鉛筆を持つ手がべたついて困るほど。瀬戸内ジャムズガードンの松嶋さんが「一番甘い果実を栽培する人」と太鼓判を押すように、山本柑橘園の南津海は、この時期人気No.1のジャムに加工されている。

園内はみかんの木々が鬱蒼と茂り、雑草が生え昆虫が卵を産み付けた葉もあるが、「無農薬」とは言いませんが、ほとんど消毒しません。虫も雑草も自然環境の一部ですからね。木を丈夫に育て、実は完熟するまで取らないということです」と山本さんはさらりと言う。

収穫した南津海は選別されて倉庫に積み重ね低温保存してから出荷する。すべてを直送しており、東京・関西のデパートや専門店に加えて個人のリピーター客も多いという。

「もう一つPRしたい果物です」と示されたのが、「弓削麻柑」という柑橘。黄色い長方形の果物で、グレープフルーツの仲間なのだという。

「原産地は台湾だという人もいますが、れっきとした国産です。熊本地方の一部で明治頃まで栽培されたといいます。この種を手に入れて栽培したんです」

皮を剥くと細長い袋がしっかり果肉をつけていて、甘みと酸味のバランスがよい夏にぴったりのフルーツである。

山本さんは10月頃には食べられる「極早生みかん」から、料理に添えるスタチ・カボスの柑橘類まで16種を栽培・販売しており、自家製マーメイドも商品化している。後で人に聞いたが、弘三さんは京都大学理学部卒、奥さんは奈良女子大学卒だそうで、ご夫妻の知的探究心と遊び心が美味なオリジナル柑橘類を生みだしているのかもしれない。

「大学を出てからは企業の研究所に勤めたりしましたが、のんびりと好きな釣りでもしながら親のみかん園を手伝おうかと戻ってきました」と言う。いまは木々や森にどんな蝶や昆虫が生息しているかに関心があり、愛用のカメラを手放すことがない。

街を見下ろす山麓へ案内してもらった。こ



◀左/南津海(なつみ)を収穫する山本さん
右/手に持つのは「弓削ひょう柑」という初夏向けフルーツ



の丘陵地が山本農園の
主農地で、全体では
2.5ha耕作している。
「このミカンが美味
しいのは、水はけのよ
い南斜面で、潮風の影
響も受けること。根が
張れないという植物に
とっては過酷な条件の
土地ですが、そのため

に木は必死で美味しい実をつけるんです」
以前は山の天辺近くまで栽培されていたと
いうが、急斜面の作業はきついため、放置さ
れたところが増えている。

その夜宿泊した同地区の海辺商店街にある
「千鳥旅館」は、蔵を改装したような民家造
りで、海産料理が人気。夕食時、隣室で10数
人の若者が会食を楽しんでいるので声をかけ
てみると、殆どの人の家がミカン農家だとい
う。「今まで皆で集ってお喋りする機会が少
なかった。これからは時々会って、地域のこ
とも考えていきます、期待してください」と
国司崇生君の元気な返事が返ってきた。

地元の「美味しい」ものを商品化する

目の前には丸くて小さい無人島、その奥に
イワシ漁が盛んでイリコの生産で賑わう浮島
瀬戸内の穏やかな海と島々を望む海辺に瀬戸
内ジャムズガーデンが建つ。フランスのお酒
落なカフェを思わせる建物で、前庭や隣接す
る畑にはブルーベリーがたわわに実を付け、
7月には摘み取り体験も行われる。

店内には木のテーブルが並び、ゆったりと

カフェが楽しめる。棚には何十種類のオリジ
ナルジャムが美しく並んでいる。2階はギャ
ラリーになっていて著名人の絵画展や作品展
等を開催、交流の場にも使われている。

9時の開店と共に若い店員が試食用のジャ
ムを並べた。ガラス容器にスプーン付で、20
種ほどはあろうか。早速試食してみてもマー
レードでも一つ一つ味も食感も違うことに驚
かされた。月毎に旬のジャムが5〜8種登場
し、年間では120種を超えらるか。

奥にある厨房ではすでに5、6人の女性た
ちが忙しそうにジャム造りを始めている。6
台並ぶガス台に大きな鍋が置かれ、種を取り
除いたアンズを煮ている。アクをしつかり取
り除いてから冷水で冷やすが、それはまだ下
拵え作業。そのあと様々な形にカットしたり
他の果実や蜂蜜等が加えられて短時間で煮詰
めていく。

隣の加工室では煮沸した瓶にジャムを詰め
てさらに煮沸する作業。整頓され一部機械化
された工房だが、あくまでベテラン女性たち
の手作業で丁寧に製造されている感じだ。保
存剤はゼロ、味もその都度微妙に異なるとい
うが、市販のジャムと比べて、豊饒な味わい
と舌触りが格別で、それ自体が高級スイーツ
である。

カフェのメニューも豊富だが、パンに塗っ
て焼くと美味しいという金時味のジャムを
注文してみた。周防大島町の農家が昔から栽
培してきた幻のさつま芋で、熱いのが美味し
いと気付いた松嶋さんは焼いて食べるジャム
として提案している。栗のような味がする。

ジャムショップを開店して以来8年、「地元

の価値に気付き、地域に根ざした活動をする」

松嶋さんのモットーは、仕入れる柑橘類は旬
のものを正規価格かそれ以上の価格で購入し、
生産者にも儲かってもらうこと。また、休耕
地をファームとして復活したり店が雇用の場
を提供することで、若者にU・Iターンする
機会を促す。そんな取り組みが功を奏し、島
にはU・Iターンする人が増えてきた。瀬戸
内ジャムズガーデンの従業員もファームでの
従事者を入れて22名になっている。ファーム
では後継者のいないみかん畑の再生をはじめ、
アンズ、ブラッドオレンジ、ブルーベリー、
イチゴ等の栽培もはじめている。

カフェで珈琲を飲んでいると初老の紳士が
微笑んでやってきた。元教師で莊厳寺の住職
をする白鳥文明さん(66)。松嶋さんの奥さん・
智明さん(39)の父上で、夫妻のIターンを決
意させた人である。

パリでジャムショップを見てから自分もジ
ャム屋を開くと松嶋さんが言い出した時、智
明さんは「冗談でしょ」と開いた口が塞がら
ず、ご主人の生まれ故郷の京都あたりなら観
光客も多いから何とかかなるかなと思ったとい
う。ところがその話を聞いた父白鳥さんが「周



▶上/瀬戸内ジャムズガーデンのカフェ。草花
が咲く庭や海の風景を見ながら至福のひと時
下/ジャム用にと休耕地を活用して果実や
花卉栽培もはじめたと松嶋さん
「多忙なのに何時も夢を追いかけたい」と
奥さんは健康を気遣う



▲養蜂家笠原さん一家。チャレンジ館にある販売店の前で。下は人気のKASAHARA HONEY



家族でコツコツと納得のいく蜂蜜を提供する「笠原さん家のハチミツ」は人気を得て、町の新たな特産品になりつつある。

笠原さんはいま、地元の人にも協力してもらいながら、増えている竹林を伐採して、ミツバチの好きな木の植樹や空き地の活用にも力を入れている。空き地にはレンゲや菜の花畑を作り、山には桜やモミジの植樹

防大島町で店を開いてくれないか」と言いだし、松嶋さんはすぐOKを出したのである。生産地のど真中でジャムを造る、しかもいま最も過疎が進んでいる地域で。ならば店も賑わう場所ではなく海に面した美しいところ、と松嶋さんは決意した。

平成19年にイターンした松嶋夫妻がオープンした店は地区のはずれにあり、智明さんの実家の荘厳寺から比較的近い。

智明さんは二人の子供の育児をしながら、今では寺の副住職としても忙しく、得意なフオークソングを生かした経典ミュージックの制作にも当たり、CDを制作・発売した。

一方、地域の世話役的存在である白鳥さんは、同級生や教え子等にイターンしないかと声をかけ、また空き家や休耕地の活用を促す活動にも取り組んでいる。

イターンして養蜂農家に

周防大島町にはU・イターンして家業の柑橘農家を後継する人、レストラン経営、IT産業、高齢者福祉業務等に従事する若い世代

が増えはじめています。

イターンして養蜂を行う笠原隆史さん(28)は、実家は岩国市で養蜂業を営んでいるが、「それを継ぐのを嫌って福岡のホテルで調理師をしていましたが、結婚を機に食物について学ぼうちに、蜂蜜の凄さを思い知った。自分も養蜂をやろうと思うようになり、周防大島町にイターンしました」と語る。奥さんの亜裕美さん(27)も賛成してくれて4年前に柑橘類や植物の花が豊富な周防大島町に住居と仕事場を構えた。巣箱を20カ所に400個設置している。その中の1箱では貴重になった日本ミツバチを育てている。

花を求めて移動する養蜂ではなく、身近にある四季折々の花や樹の恵みを生かしてここで養蜂をすることが、地域の活性化にもなると笠原さんは言う。きれいな色と味・香りが豊かな柑橘蜂蜜を中心に、島に咲く木や草の花から採る春採り・秋採り蜂蜜等も造っている。島に来てから愛由ちゃん(3)、颯愛君(1)も誕生、道の駅「サザンセトとうわ」のチャレンジ館には町の助成を得て販売店も出店した。

を行っている。

定住促進にイターン者の声を反映して

周防大島町では、島暮らしを希望する人が増えてきたことを受けて、平成24年4月に「住・職」のサービスを充実するため定住促進協議会を発足させ、役場内に定住相談窓口を設置した。



▶自ら制作した定住促進の冊子を手にも、いずたにさん。住まいのこと、生活費のこと、なんでも無料相談に当たってくれる

その相談担当者がいずたにかつとしさん(40)。彼は金融・住宅・保険等の総合的な資金計画をアドバイスするファイナンシャルプランナー(FP)で、広島に事務所があり山口県各地で業務を行っているが、平成19年に奥さんの実家がある周防大島町にイターンした。定住促進事業では官民連携の必要があると、全国ではじめてFPサービスのあがる移住相談窓口を設け、いずたにさんは「ふるさとライフプロデューサー」として役場に週3日出て無料相談に当たっている。U・イターンしたい人の気持ちに添いたいと、数日から一ヶ月間島暮らしができる「大人の下宿・島暮らし荘」を開設したり、移住してきた人を紹介するユニークな冊子を制作する等、氏のキャリアとU・イターン者への視点を生かした活動が随所に発揮されている。「3年目になりイターン者が確実に増えてきました。でも受入れる行政と住民の意識はまだ低く、これからが本番です」と語っていた。

(文)浅井登美子 写真/小林恵

- 周防大島町定住促進協議会 ☎0820-74-1007 teiju@town.suo-osima.jg.jp
- 瀬戸内ジャムズガーデン ☎0820-73-0002 http://jams-garden.com/
- 山本柑橘園 ☎0820-77-1237 http://ww5.tiki.ne.jp/kozo-yama
- 笠原養蜂場 ☎0820-74-5283



貴重な動植物と農業青年を育む里山

●鳥取県日南町

▲トマト農家池田さんから苗木の育て方を学ぶ結城さん、福島さん
 ▲右／「エナジー」にちなんの事務局がある元小学校で、伊田事務局長と農業研修生、左／トマトのハウス15棟が建つ池田農園で



地域おこし協力隊員になり農業を研修する

木造2階建役場庁舎内部は木の香に溢れ、円形に木材を組んだ小高い天井からは自然光が降り注いで眩しいばかり。役場は地元産木材で建築され、玄関ロビーには樹齢250年以上の天然杉の丸太がオブジェとして使われ、森と共に生きてきた日南町の歴史と自然の豊

広島、岡山、鳥根の県境に接した標高2800〜6000mの中国山地にある日南町。人口は年々減少し高齢化率も鳥取県で最も高いが、危機感を抱いた町と住民らが連携して外部との交流に取り組んできた結果、最近は一ターンの若者が増加中。鳥取大学の自然環境フィールド地であり農業研修生が定住する豊かな自然郷は、森でヒメホタルが静かに舞う時期を迎えていた。

かさを主張している。

朝8時には殆どの職員が出社、企画課総括室長の田邊陽子さんの案内で農業研修生が朝出勤する「(一財)エナジーにちなん」を訪ねた。廃校した旧日野上小学校の鉄筋校舎は内部を整備して町内の8企業の事務所に活用され、1階には研修生の受入れや活動を支援する(二財)エナジーにちなんの事務所がある。

伊田健一事務局長から「エナジーにちなんは地域おこし協力隊の受入れの他に、Uターン者の支援、特産品の開発や加工販売等を行っています。地域おこし協力隊というと、一般には地域に行って様々な支援活動をしますが、当町では農林業研修生として農業・林業を学んでもらうことからスタートします」と説明があった。研修期間は1〜2年間。今までに30名を農林業研修生として採用しているが、7割近い20名が残って農林業をしているというから驚きである。地域おこし協力隊制度は、昨年度から導入している。

そこで紹介されたのが、今年の4月に採用された研修生、結城信彦さん(32)と福島有貴さん(23)。農作業用の服装で現われた。

結城さんは東京葛飾区の出身で、企業に勤めていたが、同級生だった友人が5年前に農業研修生第一期生として日南町に移住してきていることから、農業をしてみたいと応募した。「都市の便利な生活に違和感を感じていました。自分で農産物をつくり、最終的には加工販売することが夢です」と結城さんは言う。

福島さんは大阪出身。今年3月に鳥取大学農学部を卒業、大学では乾燥地域における環境問題・農業問題を研究してきた。鳥取大学

では日置佳之教授らが10年前より日南町をフィールド地として、日南町に生息する動植物、過疎地対策等の様々な研究を行っている。「先輩たちの研究にも興味がありますが、まず作物を育てることから学びます」と福島さん。

他に林業研修生の山崎絵梨さん(28)もいるが、奥山へ作業に行ったため会えなかった。

早速研修先の農家へ案内してもらった。車を運転してくれたのは農業指導員の小谷正義さん。JAで農家の指導に当たってきた経験を生かして若者らの指導を担当している。

「農家の指導では失敗は許されなかったが、農業研修生には農業の楽しさと基本的なことを教えたい。皆素直で我が子のように可愛い。失敗も肥やしになりますので、まず経験してもらおうことですね」と和やかに語る。

農業の楽しさとやる気を学ぶ——池田農園

研修生を最も多く受入れているのがトマト栽培農家の池田尚弘・美知子さん夫妻。中国山地で早くからトマトの施設栽培を始め、15棟で桃太郎トマトを栽培している。50haの耕作地があり、米作を中心にトマト等の野菜栽培を手掛ける大規模農家である。

まだ二人の研修生はトマト苗の植え付けを体験したばかりで、これからは苗木を棒に固定したり不要の枝や花芽を剪定する作業を池田さんから学んでいく。トマトは収穫期をずらして栽培され、すでに1m近く成長したハウスでは花粉付け作業が行われていた。そこで働いているのが研修2年目の下谷勇気さん(26)と北條卓さん(49)。共に大阪出身で、「一年経ち、一通り出来るようになりましたが、

まだまだです。池田さんは楽しく大らかな人で、自分でやってみると任せてくれますが、それだけに責任重大で頑張ろうという気になります」と下谷さんは言いながら、ホルモン処理作業を続ける。

池田農園の高原トマトは市場でも人気があるが、形が悪かったり完熟しすぎて出荷出来ないトマトもあり、それらはジュース、ジャム、ソース、ケチャップに加工する。その担い手が奥さんの美和子さん。「農繁期は加工する時間がないので冷凍保存しておき、出荷が終わった11月頃から作業。JAの指導を受けても器械も一式揃えたんです。結構評判がよくてすぐ売れ切れてしまいます」と、見本品を出してきてくれた。ユニークなのは、青い時に摘み取った実で造ったという「青春トマト」と名付けたジャムで、トマトの香りがほんのりする爽やかなジャムであった。レストランでは池田農園のトマトの風味を残したケチャップやソースが料理を引き立てると好評だが、量産できないのが悩みであるようだ。

一期生は頼もしい農業担い手だ

続いて訪ねたのが6年前にイターンしてきた



◀トマト加工品を手に、池田美知子さん。美味しいと人気のトマトケチャップ、ジュース、ジャム等
▼専業農家・第1期生の指導員が「上出来だ」とほめる

た研修一期生で、専業農家の長谷川直人さん(32)。若手農家3人で多里生産組合を立ち上げて営農し、露地野菜や米等の生産を行っている。長谷川さんは山合いの畑で一人黙々と定植して間もないピーマンの手入れを行っていた。マルチから伸びた苗はもう花を開花しているものもあり、指導員の小谷さんが「いい腕しているね」と感心している。

ピーマンは日南町の特産品で、肉厚で香りがいいと関西市場で評価が高く、長谷川さんも栽培を始めて4年目になる。「米(コシヒカリ)、りんご、トマト、椎茸栽培など何でもやっついて休む暇がありません。農業をした当初は何をみても驚き感動しました。こちらのやる気に植物は応えてくれます」と言う。地元の女性と結婚、一児の父親でもある。

同じ小中学校、高校で長谷川さんと同級生だった結城さんは「同級生というより大先輩の風格ですね」と感心することしきり。そんな





▲木造庁舎を背景に、吉田さん。鳥取大の学生だった頃よりサンショウウオを調査してきた▼オオサンショウウオ(撮影/岡田純研究員)

な中、福島さんが畑にいた小さい蛇をさっと捕まえて「お帰り」と脇の溝に放した。農地や自然に親しんできた頼もしい女性である。

オオサンショウウオの貴重な生息地

鳥取大学の環境調査等で日南町を訪れていた吉田博一さん(26)は昨年4月に日南町職員に採用され、住民課でゴミ処理担当係をしている。鳥取大学大学院・農学部工学教室で学び、平成24年に日南町に来た。小学校に泊っては河川を下流から上流に向かって歩き、オオサンショウウオの生息調査を続けてきた。

この地方では「ハンザケ」と呼ばれて親しまれ、全長60〜80cmのものが民家あたりでも見ることができるといわれる。現在では国の天然記念物に指定され、環境省の絶滅危惧Ⅱ類になり、全国的に生息数が激減している。

鳥取大学では2年間、町内各河川を延1千回以上に亘って夜間調査を行った。その結果、岡田純プロジェクト研究員の報告によると、日野川上流(多里地区)はオオサンショウウオの生息密度が高い貴重な生息地であることが確認され、530個体が登録された。



ンショウウオの繁殖のための巣穴が消滅したり川を移動しにくくなっています」と吉田さん。そのため町に住み役場の仕事を続けながら、ハンザケへの啓蒙と、日南町の自然や河川環境の保全活動を行っていきたくて入庁を希望した。

「日南町には豊かな河川や森があり、生き物や植物も豊富です。ゴミのリサイクルを考える役場の仕事にも興味がありますが、休日にはサンショウウオの調査が続けられて、大変感謝しています」と吉田さんは言う。

鳥取大学と日南町は平成18年3月に連携協定し、大学は町に地域活性化教育研究センターを設置した。農学部日置教授を座長に地域学部、医学部、工学部等様々な分野が地域調査、住民との交流、出前授業、商品開発等を行ってきた。多くの学生や教授が来るようになり、住民の意識も大きく変わってきたという。現在では大学と町の連携講座「にちなん



▲子供の自然観察会

「しかし、河川の改修工事、砂防堰堤やダム設置等で、オオサンショウウオの繁殖のための巣穴が消滅したり川を移動しにくくなっています」と吉田さん。そのため町に住み役場の仕事を続けながら、ハンザケへの啓蒙と、日南町の自然や河川環境の保全活動を行っていきたくて入庁を希望した。

「よろず請負いしますと、高齢農家の農作業から大工、買い物なども時給制で請け負っており、正社員とパートで25、26名が所属しています。毎月河川や道路などの清掃活動もしています。経営的には米子自動車道のメンテナンス作業があるので赤字にならずトントンですが、活気ある地域づくりをするには人手が足りない、特に若い人が欲しいです」と西尾社長。

そんな中でいま人気を呼んでいるのが農家レストラン「アマダス茶屋」。気象庁の測量地がある峠沿いにある地区交流施設で、長年手打ち蕎麦を提供してきたが、蕎麦職人が高齢化して



◀峠に建つ農家レストラン「アマダス茶屋」

町民大学」の開催、医学部学生の日南病院での臨床研修、大学付属病院との電子カルテシステム化、自治体職員の大学派遣等が行われている。

農家レストランが繁盛、ヒメホタル観察会も

地域の活性化で注目されるのが、地域の農業や土木業、互助活動等をビジネス化して「有限会社だんだん」として運営する笠木地区。代表の西尾篤朗さん(58)は飼料会社を運営、高齢農家の作業代行や米子自動車道の草刈りや除雪等を行ってきたが、公団から会社組織にして欲しいと言われたのを機に、平成18年に地域住民数人と有限会社だんだんを設立した。



▲アメダス茶屋にて、左から西尾社長、西尾さん、田邊総括室長、近藤さん、坪倉シェフ
◀魚介類や若鳥に野菜たっぷりのランチ



▲女性客で賑わう店内

の奥さん、接客では西尾社長の二男の若奥さんが働いており、皆が頑張っていた。「だんだん」の近藤仁志さんがいま夢中になっているのがヒメホテル。「山上まちつくりの会 蛭守」という名刺をくれ、ホテルの生息する場所へ案内してくれた。

福万来という地名の清流と手入れされた杉檜が茂る山林では、7月になると河川周辺ではゲンジボタルが舞い、森では地面いっぱいヒメホテルがダイヤモンドを散りばめたように輝くという。

「街燈の無い事が自慢。ヒメホテル夜空散歩」というポスターも作られ、7月4日〜13日には日野郡内の旅行会社による観賞会が開かれる。参加者は夜8時から約1時間半、暗闇の森で蛭鑑賞をする。その日のために近藤さんが製造したTシャツは、子供たちから募集したイラストを基にデザイナーが制作、一部が蛭のように光るもの。当日はアメダス茶屋から弁当が提供され、参加費は米子からの往復バス代を入れて2000円。虫除けスプレーやデジタルカメラ等の使用を禁止(撮影不可)する等の規制も行なわれる。

閉店日が多くなっていった。そのため「だんだん」が店舗を改修し、米子で腕をふるっていたイタリアンレストランの坪倉完洋シェフにUターンしてもらって「アメダス茶屋」として再生オープンした。

地元の野菜や地鶏、魚介類をたっぷり使った坪倉シェフの創作料理は好評で、町外から来る客も増えている。お昼の日替り定食にはスープやサラダ付き、香り豊かな珈琲も出るので、女性客で大賑わい。あとで知ったが、厨房では「だんだん」取締役常務の近藤仁志氏



「す」と近藤さんは熱く語る。川の冷気と森の静寂が心地よい聖地であった。

文/浅井登美子 写真/小林恵

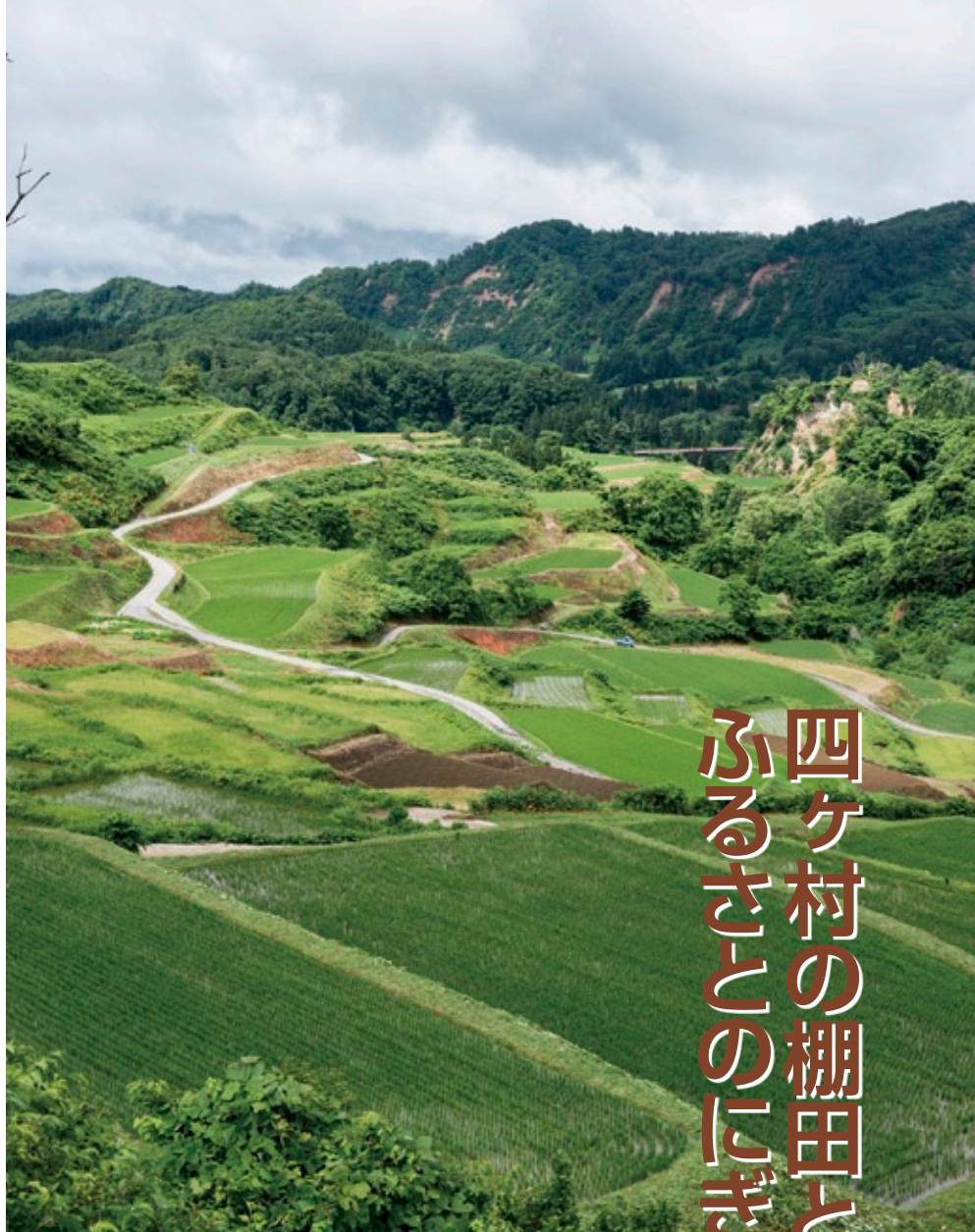


▲ヒメホテル観賞会用のポスター
◀サンショウウオやヒメホテルが生息する福万来の森や河川。蛭守を自認する近藤さんは、祭りを盛り上げたいとTシャツも手作りした

●日南町役場企画課 ☎0859-82-1115
●有限会社だんだん ☎0859-82-1600



▶四ヶ村の棚田。四つからなる集落には、大小いくつもの棚田風景が広がっている



四ヶ村の棚田と肘折温泉で創る ふるさとのにぎわい

●山形県大蔵村
おくらむら

く支えていた。

今回の旅の目的地は、舟運や街道で栄えた村の中心部から幾重にも連なる山を越えた東部にある肘折温泉と四ヶ村だ。肘折温泉は、月山の麓に抱かれ、四ヶ村は葉山の麓に4つの集落を広げている。どちらも大蔵村らしく深山の雰囲気濃い静かな土地だ。

この二つの地域に共通するのは、地域のにぎわい創りの活動だ。四ヶ村は、先人が長い

深い山々に抱かれた大蔵村の四ヶ村と肘折温泉郷。それぞれの地域が持つ特徴に、新鮮なアイデアを加えながら実践するにぎわい創りが注目を集めている。土地と土地、人と人をつ結び、大きく育っている小さな山村の取り組みをご紹介します。

出羽三山詣と最上川舟運の地

山形県の最上地方、大蔵村の人口は、約3500人。総面積211.59kmのうち、約85%を山林が占める。この豊かな自然の中

心となっているのが、村の南にそびえる標高1984mの月山と1462mの葉山だ。これらの山々を源にした銅山川と赤松川が村内を潤しながら流れ、かつては舟運でも栄えた大河、最上川へと合流する。

歴史的に見ると大蔵村の発展は、この最上川の存在が大きく、村北部の清水地区は最上川舟運の積出港があったことで長く繁栄を築いた。また、出羽三山への参詣路でもあった舟形街道も村内を走っており、近隣同士はもちろんのこと、最上地方の人と物の交流を広



◀上/肘折温泉の特徴は、何と言っても「湯治風情」。湯宿が並ぶ狭い路地には、「ひじおりの灯」が灯り、湯治客が散歩を楽しむ
下/「ひじおりの灯」の灯籠が掲げられた共同浴場の上の湯。肘折の源泉だ

年月をかけて作り出した棚田の再生保存で地域づくりを盛り上げ、肘折温泉郷は、開湯1200年という名湯にアートイベントなどを組み合わせた新しい魅力作りを行っている。

棚田は人が来るから美しくなる

まず、最初に訪ねたのは、四ヶ村開発協議会の中島敏幸さんだ。

中島さんは林業のかたわら、平成14年に四ヶ村開発協議会内に棚田保存委員会を立ち上げて以来、棚田の保存活動を担ってきた一人。ご自身も棚田で米を作るほか、休耕田にハスを植え、ビオトープ化するなど、新たな棚田の姿を模索する活動にも積極的だ。

中島さんによると、棚田は四ヶ村の世帯数100戸、人口500人の4集落に点在し、総面積は120ヘクタールに及ぶという。この棚田を地域づくりに活かすヒントは、石川能登の棚田だった。現地を視察し、棚田目当てに観光客が来るという声を聞いたとき、「自分たちが育った村にもたくさんさんの棚田があり、それが魅力として発信できるツールになるかもしれない」と故郷の特色を再認識したという。

「でも、当時は、簡単に観光客を呼べる状態ではありませんでした。基本的に棚田の作業効率は悪いわけですから、一番に耕作放棄されるわけです。農家の経済を無視して、観光のために棚田を守ろうなんて、そんな簡単なことは言えませんでした」と中島さん。

それでも、保存委員会として、棚田のビューポイントに看板を建てることに始まり、棚田の所有者には棚田の価値を話し、耕作のお

願いをしてまわったという。

「本当にこれで地域づくりにつながるのかと正直半信半疑だった」という中島さんだが、結果としては、棚田に人の手が入るにつれ、棚田を見に来る人が増えたという。

「まず見に来たのはカメラマンの人たち。棚田の前でカメラを構えて何時間も立ち続ける姿を見て、村内の人も棚田ってそんなに魅力があるんだと気付いたようです。そうになると少しはきれいにしておかなきゃと草を刈ったり、畦を修繕したりと手を入れるようになっていったんです」

こうして棚田を中心にした輪が広がっていきななかで、最初に関係者だけのイベントで始めたのが「棚田ほたる火祭り」だった。

「棚田をキャンドルで飾ってみようとか誰かが言い出し、実際にやってみるとこれがきれいで、じゃあ、観光客を呼んでみようとか、オカリナが似合いそうだからコンサートをやろうとか、どんどん大きくなってしまったんです」と中島さん。

早いものでこのイベントも今年で11回目。最近では、肘折温泉郷の宿とタイアップしてお客さん呼び込むなど、地域のイベントとして定着。棚田の美しい造形に1200本ものキャンドルが灯り、オカリナの音が流れる幻想的な夜に多くの人が酔いしれるという。「棚田が今のようになれたのはやっぱり人が来てくれるから。家庭でもお客さんが来る日は掃除するでしょう。それといっしょですよ」と、中島さんは地域づくりの秘訣を笑って教えてくれた。

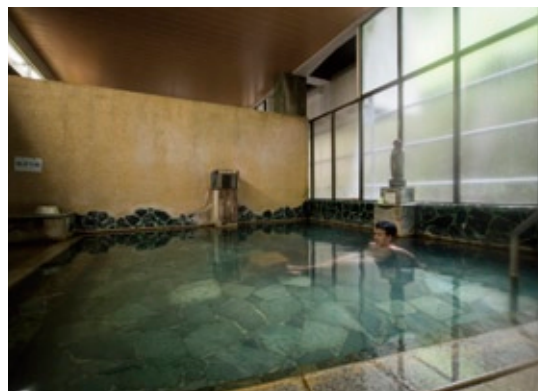


▲キャンドルで棚田を灯す棚田ほたる火祭り(大蔵村商工観光課提供)



▲棚田の保存活動を続ける中島敏幸さん
地域の人たちと連携しながら美しい風景を守っている
◀草刈りをする地域の人たち

▶上/夕暮れの肘折温泉。心身ともに安らげる時間がここに。下/共同浴場の上の湯は、肘折温泉の伝説を伝える湯として人気



▶「ひじおりの灯」を支えてきたつたや肘折ホテル(0233-76-2321)の柿崎雄一さん



歴史と伝統に人とアートの力を加えて

四ヶ村の棚田という新しい観光名所から車で約15分。幾重にも連なった山が途切れた先、肘折希望大橋と言ふ名のループ橋をぐるぐると降りて行くと現れるのが東北随一の湯治場との評判が高い肘折温泉郷だ。

開湯は今から1200年前のこと、肘を折ったお地藏様が、この地に湧く湯に浸かってみるとたちまち癒えたことから「肘折」との湯名で呼ばれるようになったという。もちろん、これはあくまで伝説ではあるが、実際に湯の効能は素晴らしく、「往路は杖をついてきたが帰路には杖を置き忘れる」ということが今も頻繁に起こるのだという。

また、かつては東北各地にあった湯治場の雰囲気を残しているのも肘折温泉の特徴だ。宿が立ち並ぶ狭い路地には、浴衣姿で散歩する湯治客の下駄の音が心地よく響き、湯治場風情がのんびりと漂う。

この肘折温泉で近年話題になっているのが、「ひじおりの灯」と呼ばれるアートイベント。

地元の東北芸術工科大学とコラボレーションし、アートによる肘折温泉のにぎわい創りを8年間にわたって行っている。

「アートで地域づくりは最近では珍しくありませんが、アートで肘折を再発見しようというのが、『ひじおりの灯』の特徴です」と語るのは、つたや肘折ホテルの柿崎雄一さんだ。「ひじおりの灯」を運営する肘折温泉プロジェクト実行委員会として、初回からイベントに携わってきた。

柿崎さんから委員会が東北芸術工科大学とイベントを創っていく際大切にしたのは、地元の人や長年にわたり肘折に通ってきたおじいちゃんおばあちゃんたちの視線だったという。「斬新な現代アートを温泉街に飾るのではなく、肘折をテーマにしたもので世代を問わず共有できるアートを作りたいとキュレーター

の先生と話しました。あくまで肘折温泉が主役というのが大切な部分でした」。

その話し合いの結果生まれたのが、参加作家が肘折温泉に滞在し、肘折温泉から得たテーマを絵灯籠にして、温泉街各所で展示する



というスタイルだった。

「この絵灯籠には、作家が見出した肘折温泉の歴史、文化、生活などが、多彩な表現方法で描かれます。それが、我々にとっても本当に新鮮で刺激的。この感覚が新たな地域づくり活動をやる上での力になると感じています」と柿崎さん。単なる観光振興には留まらないアートイベント。そこには眼に見えない

▶肘折温泉のにぎわい創りの大きな目玉となっている「ひじおりの灯」。子供からお年寄りまでが楽しめるアートイベントとなっている(写真提供=柿崎雄一氏)



にぎわい作りも含まれているのだ。

肘折温泉を支える若者たち

肘折温泉に行くと、「ひじおりの灯」をはじめ、毎月のように何かしらのイベントをやっていることに気付く。古くから続く祭りもそのひとつだが、新たに催されるものも多い。

こうしたイベントは、お客さん一人一人が肘折温泉での滞在時間を楽しんでもらうために企画運営されているという。

イベントの運営を行うグループはいくつかに分かれるが、「肘折に暮らす若者の多くがいるんな形で参加しているんですよ」と教えてくれたのが今回の取材でお世話になった湯宿「大穀屋」の若旦那こと柿崎道彦さんだ。

道彦さんによると、肘折温泉旅館青年部のほか、地元住民で構成される青年団、さらに消防団など、若者が参加する団体は複数あるが兼任の場合が多く、常に駆り出される状態

にあるという。

「でも、それもいいなって思うんです。小さな温泉街なんだから、みんなで盛り立てていかないですよ」と道彦さんは笑う。

現在31歳の道彦さんは、宿を継ぐために大学を中退し、調理師の修業を経た後にUターン。以来、地域づくりの活動はもろろんのこと、若旦那として接客に調理にと忙しい日々を過ごしてきた。この原動力となっているのが、「外に出てやっぱ肘折っていいなって気付いたこと。湯治場としての伝統を守りながら新しいものも取り入れていきたい」という故郷への情熱だろう。

道彦さんのこうした心意気が大穀屋に浸透しているのか、帰郷時のような温かさに加え、どこか新鮮な空気が満ちている。洗練された料理に加え、湯宿の楽しさを伝えるポップなウェブサイトもその空気感を作るひとつだろう。



▲上／山菜を中心した地元料理が並ぶ大穀屋(0233-76-2236)の夕食
▶下／大穀屋の若旦那、柿崎道彦さんと大女将と若女将、家族で切り盛りするアットホームな宿が多いのも肘折温泉の特徴だ

自然、人、歴史、文化、芸術など多くのチヤンネルを上手に組み合わせながら、訪れる人も迎える人も元気になっていくような地域づくり。

なかなか簡単に結果を出せるものではないが、ここ肘折温泉と四ヶ村ではその萌芽が大きく成長しようとしていた。

文・写真／奥山淳志



▲地蔵倉。仏教置跡、説話伝承地で、地蔵菩薩の石像が安置されている

●大蔵村産業振興課 ☎0233-75-2105

▶右／肘折カルデラ温泉の冷酸泉を加えた「肘折カルデラサイダー」はお土産として人気
▼下／肘折温泉の伝統工芸として知られるのが「肘折こけし」。現在、この伝統を守るのが、鈴木肘折こけし工房(0233-76-2217)の鈴木征一さん



▶「交流館もりもり」に用意された手作りの坂車。芝生の中に設置されたコースを手動で走る



福島駅から車で約30分。山並みの稜線を望む丘の上に、体験メニューを各種取り入れた宿泊・交流施設がある。伊達市(一社)つきだて振興公社が運営する施設で、原発事故から3年を経た今、市民の暮らしも落ち着きを取り戻し、体験教室は土日になると子供連れの家族のイベント、レストラン・宿泊施設はほっと寛げる花の郷として賑わっている。

子供が包丁を使って造る ピザ焼き教室

旧月舘町、霊山町、保原町、梁川町、伊達町が合併して誕生した伊達市。阿武隈川東部に広がる田園地帯で、水田には青々とした稲穂が戻り、畦道もきれいに手入れされている。伊達市の南端にある月舘町に入ると、「あじさ

主役は子供たち 「交流館もりもり」でピザ焼き体験

●福島県伊達市月舘町

いの小径」という看板が立ち、山沿いの道約2kmに様々な色の紫陽花が見ごろを迎えている。住民が株を植えて育ててきたものだという。

山林を抜けると大きなグラウンドがあり、いくつかのチームが野球をし、家族達が応援している。いつもの平和な日曜日に戻ってきているとホッとす。

その先の小高い丘にあるのが、お風呂と会食が楽しめる公共の宿「つきだて花工房」と、交流施設「交流館もりもり」。広大な高原には山野草やハーブ園、炭焼き小屋や農園があり、施設の窓辺からは、手入れされた芝生や樹木をゆったり眺めることが出来る。

「交流館もりもり」は、地元産の野菜や農産加工品直売所「やさしい工房」や野外体験棟等

を併設した交流体験館で、その日も10時からピザ焼き体験教室が2グループで行われた。我々は、伊達市内からやってきた子供と保護者総勢26名の子供会を取材させてもらった。子供は男子中学生から2、3歳児まで15名以上、保護者にはお父さんも5名程が参加する、賑やかでアットホームなグループである。午前10時、エプロン等をした親子が集合。指導に当たる半澤厚子さんと高野和子さんが、「今日は、大人は子供を叱らない、子供たちはここでしか出来ない遊びを楽しむ。でも作って食べ終わるまで他の遊びはしない、自分で作らないと食べられません」等のルールを説明したあと、10個のボールと生地にする粉などを配った。生地造りははじめてのお母さんも多いようで、期待しつつも少し緊張気味。

◀木片や木の実を使って時計をつくる木工教室



▲家族ごとにテーブルを囲んで作業開始
▼生地造りに奮闘する子供たち



▲出来あがった生地に穴あけ
▼載せる野菜も子供が切った



10枚の生地を作ってしばらく寝かせ、後で20枚に分けて様々な材料をトッピング、炭火の熱で焼き上げるというもの。今日の主役は子供たち、生地造りでは粉が手について大騒ぎだったが、指導員のアドバイスで、やがて形よく練り上げられた。

続いて材料の用意。トマト、ピーマン、玉ねぎ、ベーコン等を子供たちが刻んでいく。初めて包丁を使うごちない手つきをお母さんたちはじつと見守る。中でも子供たちにとって、コーンの缶を開ける際に缶切り用具を使う体験は初めてのようで、高野さんは殆どの子供に体験させるようにした。

一方で野外には薪や炭、段ボール箱が10個用意されている。段ボールは内側にアルミホイルを張り、上部に4本の針金を取り付けてある。下に炭火を入れ上段にピザを置いて、蓋をして約10分間ほど蒸し焼きにするという手作りアイデア品である。

頃合いを見て一人のお父さんがレンガ炉で小枝を燃やし炭に点火していく。一方で、子供たちは大きくふくらんだ生地を丸く伸ばして、その上にてんこ盛りに野菜やチーズを載せる最後の作業。すっかり慣れてきて、母親たちはテーブルや空いた器の片付けをしている。

半澤さん、高野さんが段ボールに炭入れを行い、そこにピザが入れた。蓋をして10〜15分間ほど蒸し焼きする。不揃いだったピザは炭火で自然に形も整えられて、香ばしい匂いを放ちながら焼かれていく。

12時近くになり、サラダや飲み物も用意されたテーブルでは、子供たちが自分たちで作

ったピザが運ばれてくるのを神妙にじつと待っている。運ばれてきたピザはさらにふつくと大きく狐色になり美味しそう。早速熱いのを「美味しい」と叫んで頬張りあう。

当初は照れて作業に消極的だった中1と小6の兄弟も、途中から積極的に生地作りに励み、一段とポリウムのあるピザが焼き上がってきた。お母さんの背中でごずついていた2歳の女の子も椅子に座って嬉しそうに仲間入りして食べ始めた。

「この輝いた顔が見るのが最高、励みになります」と高野さんは言っていた。

放射能検査も万全、新鮮地場野菜

「交流館もりもり」は、その名前の通り沢山の体験メニューを用意している。竹で作る水鉄砲や竹ぼっくり、弓矢は自分で作って遊べるので人気がある。また、木の実や木の枝で作るペンダントや飾りには、小さい子供から年配の方まで楽しめるメニューである。夏休みには「流しそうめん」体験が人気のようだ。一方「つきだて花工房」では月産産の野菜や加工品をふんだんに使った季節料理や特製弁当が話題で、我々が訪ねた日も団体客や順番を待つ家族であふれていた。

これらの食品は安全性を一念に確認、野菜売り場でも販売する野菜のすべてを放射能検査しBq検査済ラベルを貼って販売している。そのため、直売所会員の高山チヨ子さんの右手指には大きなマメが出来ていた。野菜を切り刻んで検査する際に出来る包丁タコだという。「安全性が確認されて風評被害も減ってきたため、ようやく農家も元気が出てきまし



▲炭火を段ボール炉に入れてピザを焼いていく。左/高野さん



た。新鮮で美味しいというお客さんが増えていきます。でも月産産自慢の梅や山菜はまだ出てこないねえ」と高山さんは言う。野菜売り場にさらに賑わいを取り戻したいと、自分でも野菜を作り頑張っている。農家の主婦でつくる加工部では、大豆製菓や味噌、漬物等を製造販売している。

そんな時「ハーブを摘みたい」と女性がやってきた。施設周辺の高原は初夏の草花が咲き、工房が育てているハーブ類も美しく開花している。コップ一杯300円でラベンダーが摘めるため、花摘みを楽しむ女性の姿があった。



▶下右/「やったぜ」とご機嫌の浦田悠希・光君兄弟
下左/交流館もりもりの建物と庭園



▶浦河ではどこでも見られるサラブレットの親子



新緑の生産牧場では仔馬たちが駆けまわり、別の牧場では数々の記録を持つ名馬たちが陽だまりの牧場でゆったりと草を食べている。最強の五冠馬と称されたシンザンをはじめ多くのサラブレッドを生んできた浦河町には、JRAの日高育成牧場と軽種馬育成調教センターがあり、約200の牧場がある。人々は四季折々の自然、緑の風や太陽・雲の動き、潮の香りなどを馬たちと共有しながら生活している。

初めて訪れる人にも、馬は優しい眼といなきで出迎えてくれて、望めば背に乗せて山野へも連れて行ってってくれる。たちまち馬に恋してしまう瞬間だ。そして町民もまた、訪れて来る人々を気軽に親しく迎えてくれる。そんな魅力に惹かれて移住したり、「ちよっと暮らし」を体験する人にとって浦河町は北海道の中で人気のまちだ。

訪ねた日は、JRA日高育成牧場と浦河町共催による「夏季町民乗馬大会」が日高育成牧場で開催された。午前は80cm、100cmクラス障害飛越競技を一般と少年団の選手たちが競い、午後は低障害飛越を一般とポニー少年団が、続く部班活動では一般中級1(駆歩)、一般初級(速歩)等の競技が行われ、減点方式でタイムが競われる。障害飛越競技はオリピックでテレビ中継するのを見たことがあるが、身近でプロ級の選手や高校生・中学生が馬と一体になって数々の障害を越えて走る雄姿を見るのは初めてである。中学生の少女が大きな馬に乗って颯爽と障害を次々に越えて

馬にふれ、馬たちの時間で暮らす 移住したい、「ちよっと暮らし」がしたい町 ●北海道浦河町

サラブレットや騎手の卵たちに会える町

いく様子には驚嘆した。しかし観客席から見学する人たちは、見慣れた様子で、ひいきの選手と馬の競技に拍手を送ったり、仲間と意見を交わしている。同大会は秋にも実施され、他にも「うらかわ馬フェスタ」をはじめ、各乗馬教室など馬に関する行事がいろいろあるという。

会場入口付近では2頭のポニーを相手に小さな子供たちが頬ずりしたり、乗馬して戯れている。馬との暮らしは幼い頃から身につけ、「早く走る馬を育てる、人と馬が一体に走る」というサラブレットの世界の基本が培われていると感じるひと時であった。

JRA日高育成牧場は、浦河町の宿泊施設「うらかわ優駿ビレッジAERU」に隣接しており、総面積1500haという広大な敷地



▲町民乗馬大会で障害飛越競技をする選手



▲競技場に向かう高校生選手



▲ポニーと遊ぶ子供たち。午後にはポニーに乗馬して大会に出た

◀谷川牧場にあるシンザンの銅像 他にも名馬3頭を供養している



◀展望台から見たJRA日高育成牧場。
モダンな厩舎が立ち並んでいる(下)



内に研究施設や育成施設が点在している。強い馬の育成、軽種馬育成調教場の管理運営、草地や土壌の研究等を行っており、特に1000mの屋内直線コースや屋内坂路コースは世界にも類を見ない規模を誇っている。正門前にある展望台からはJRAの施設や調教師や馬の姿を遠くに眺めることが出来る。ここから生産牧場、厩舎、調教師らの夢をのせて数多くの名馬が誕生している。

日高地方へ何回か来ているが、特に生前のシンザンに出会えたことが思い出される。ヒンドスタンを父に持つシンザンは60年代に五冠賞を取った名馬中の名馬(19戦15勝、2着4回)で、引退後は谷川牧場で種牡馬として暮らし、平成8年に35歳3カ月という長寿を全うした。その前年に我々は牧場で静かに過ごすシンザンに会うことができた。容姿は少し衰えていたが「ありがたい、元気で」と言うと、涼しげで穏やかなまなざしを向けてくれた。

「うらかわ優駿ビレッジAERU」とJRAへ行く道は天馬街道(サラブレッドロード)と言われ、手前の谷川牧場にはシンザンの銅像

が建っている。その先の優駿さくらロード(3kmにわたってエゾヤマザクラが咲く並木道)を行くと、樹木や芝生が美しい丘陵地の中に宿泊・入浴施設、優駿ビレッジAERUが現われた。

手前の芝生では三冠馬トウショウボーイと子供の銅像が迎えてくれる。

ホテルのロビーにはサラブレッドの写真集や北海道馬産地マップや牧場のガイド書、騎手名鑑等が置かれている。AERUでは乗馬コースも多様で、乗馬用の馬も11頭飼育されている。宿泊して乗馬を楽しむ客が多いのも特色のようだ。

馬と人に魅せられて 浦河へ「ちよつと体験」移住

浦河には馬と接する暮らし、豊かな住環境を求めて多くの人が訪れ、移住や交流移住をする人が増えている。平成25年までに「ちよつと暮らし」を134組278名の人が体験し、47世帯95人が移住した。これは町企画課移住交流推進室を通じての数だから、牧場へ直接移住した人を加えると何倍にもなると思われる。

夏季町民乗馬大会を見学していた松嶋年男さん(69)・和津代さん夫妻も浦河に通い続けている人たちである。4年前に神奈川県からマイカーで浦河町へやってきて、体験移住制度があることを知った。以来町の紹介で8、9月に体験住宅を借りて夏期暮らしを満喫していたが、今年から4月から10月末までの7カ月間滞在することにしたという。

「以前から乗馬も少しやっていたが、浦河で



は本格的に楽しめる。乗馬もいいが、浦河の人々が好きなんだよ」とご主人は言う。「先日も海岸の方へ出かけ、漁師さんと話していたら、いきなり採れたてのキンキ(白身魚の高級魚)を一匹くれた。他ではあり得ないことです」



▲浦河町乗馬公園。建物は伏木田光夫美術館で、周辺は広大な乗馬コースになっている
▶手入れされた丘陵地に建つ「優駿ビレッジAERU」。トウショウボーイの銅像が迎えてくれる

町には、ちよつと暮らしや移住者に町をガイドしたり、相談に乗ってくれる「うらかわ暮らし案内人」という町民ボランティアがいる。料理人、主婦、馬事関係者、農家の人など約17名と4団体が登録しており、趣味人で世話好きな人たちだという。

「どこへ出かけても誰に会っても、何を食べ



でもいつも楽しくて新鮮です。今年から中古ですがとても広い家に住めることになりましたので、移住してしまおうかと思っっているんです」と和津代さんは言う。

北海道の中では気候が温暖で、冬の気温は寒い日でマイナス10度程度。雪が少なく、降ってもじき溶けるので、日中は馬たちも馬服を着て放牧地で過ごす。

移住担当の安藤学移住促進係長と愛下延幸企画係長が、移住体験住宅へ案内してくれた。平成22年に新築した平屋建てオール電化住宅の一つで、家の周りで野菜栽培を楽しむことが出来る。ウッドデッキ、物置小屋付で、道路をはさんで目の前は牧場という好環境だ。

家に入って驚いた。広々とした居間にはお洒落なソファやテーブル、テレビが置かれ、台所には電気釜、鍋、食器に至るまですべてがきれいに整頓されて収納されている。ベッドのある寝室、多目的ホールの他に、ペットの居場所になる作業場、野菜収納場等に使用できる8畳ほどのワークスペースもある。「ないものは寝具だけです。布団は電話をすれば業者さんがすぐ届けてくれます」と安藤

係長。暖房にはペレットのストーブを設置しているが、気密性が高く日当たりもいい家なので、冬も寒さ知らずだという。しかも家賃は月7万円。親しい人たちと一緒に暮らすのにぴったりの家である。

こんな体験住宅が浦河には11棟開設されている他、個人の住宅等も借りることができ、その情報はインターネットでも配信している。

町が発行した移住関連の資料の中に『うらかわ暮らし』という絵日記による移住体験記録が4種類ある。平成19年に埼玉県からきた「KEIKO」さんが描いた夏の浦河、冬の浦河体験絵日記。町で見た自然や人々との出会い、馬やオオワシ等とのふれあい等を感動的に描いている。店で売っている商品の調理法まで克明に記述していて、参考資料にもなる。続いて、平成22年に栃木県から夫婦で「ちよつと暮らし」を体験しに来た絵手紙教室の講師をする岡崎弘子さんの『涼しさを求めて』を発行した。特に素晴らしいのは、岡崎さんが花等の植物や漁貝類を調理するおかあさん夏祭りの様子等を鮮明に描いていること、KEIKOさんが冬の牧場で馬服をきて牧草を食べる母子馬とそこへ忍びこんできた鹿の親子、冬の浦河港の賑わい等をユーモアたっぷりに描いていることが印象的であった。

海のまち浦河はグルメの宝庫

浦河は鮭、イカ、昆布等が豊富に獲れる豊かな漁港で、特に夏に獲れる鮭は「トキシラズ(時鮭)」と呼ばれる高級魚。訪ねた川潟商店には入荷したばかりの時鮭が数匹あった。鮮度を保つため船上で締めるそうで、大きく



▲新鮮な時鮭を手にとる川潟さん



▲やままる食堂の昼食ランチ

て銀色に輝き、最も脂がのっている旬の鮭で、4.9kgの重さのものが1尾1万円以上。刺身として人気のナメタカレイ、オヒョウもある。川潟さん夫婦は小世帯でも気軽に食べられるようにとパック用に調理しておいた。町では「ちよつと暮らし」の人や観光客を対象にした体験漁ツアーや魚のさばき方を指導して魚料理を味わう催しも行っている。

昼食はそんな浦河自慢の旬の魚料理を出してくれるやままる食堂へいった。刺身、時鮭の焼き物、メヌキの煮ものに自家製の漬物や野菜など。その美味しさは格別であった。

これらの店がある海岸沿いの国道235号は、「優駿浪漫街道」とも呼ばれ、日高地方の歴史と文化を今も色濃く残している。明治年間に開設された元浦河教会、開拓団赤心記念館、馬関係の蔵書が道内トップクラスを誇る



▶モダンな街並みが続く歴史と文化の「優駿浪漫街道」



▲名馬たちが余生をおくるAERUの牧場



▲厩舎で馬の世話をする太田さん、大矢さん



▲はじめて乗馬体験する男女を指導する日高さん

浦河町立図書館、馬事資料館等がある。そしてこの街をグレードアップしているのが街並み景観。電柱・電線がなくお洒落な街灯が設置され、商店街毎に家もビルもお揃いのデザインのとんがり屋根が施されている。国道の拡幅工事をした平成7年に国の「ふれあいの道」事業にも認定され、町民の協力でモダンな街へと生まれ変わっていったという。冬の漁港ではチカという小魚を釣る人で賑わうそうで、時にはオオワシやオジロワシが飛翔する姿も見える。

馬に乗って森へ、原野へ

さて、いよいよ乗馬体験。AERUの運営する放牧場にはダービー馬のウイニングチケット等が余生を送っているが、乗馬用の厩舎ではコロシ(7歳)、ミルト(20歳)、ラウジ(8歳)が待っていてくれた。指導員の太田篤志さん(31)、日高えりかさん、大矢真琴さんが厩舎で彼らを手入れして乗馬コースへ連れ出した。人に慣れているので頬ずりもできるほどだが、乗馬には一定のマナーが必要だ。乗馬する松嶋夫妻は管理室で乗馬服に着替えて笑みで登

場、太田さんの指示でコロシとミルトに乗った。乗馬経験が豊富な二人だけに、背筋を伸ばしてたづなを軽く持つ馬上の松嶋さんは颯爽として、からだもひとまわり大きく見える。乗馬コース内の近くの森と原野を散策し、二人を乗せた馬は鬱蒼とした森の中を進んだあと、広い原野でしばらく走行と円陣を組んでの駆歩を楽しんだ。当初は町を一望する山の峠行きを計画していたが、当方の日程の都合で断念してもらった。牧場とクラブハウスのまわりには豊かな森や草花が生い茂る自然があり、遠くに仔鹿の姿もあった。散策から帰ると、若い男女が乗馬体験をしていた。初めてというが、日高さんの指導よろしく、いきなり乗馬してコース内をゆつくり歩行したあと、外の牧草地へ出かけていった。きつと馬に恋し、乗馬に夢中になることだろう。敷地入口には明治40年に建築したという文化遺産的厩舎があった。改築された厩舎ではダービーを制したウイニングチケットや有馬記念で大穴をあげたダイユウサク、ハルウララのお父さんニッポータイオー、ヒシマルサ



等の名馬が20歳を過ぎても元気で余生を送っている。彼らがいる近くの丘の放牧場へ行くと、愛想よく一頭が近づいてきた。「会いにきたの?」と言うから、「今度はリンゴと人参をもつてくるからね」と詫びて、再来する約束をした。

馬たちの世話をする太田さんは、騎手をめざして修業してきたが、身長や体重に問題があり、この指導員になった。「馬の世話や乗馬指導が出来て最高に幸せです」と言う。日高さんはJRAの獣医さんと結婚、「馬の健康についても学びたい」、そして大矢さんは父親が浦河で寿司店を経営しているが、「馬の世話をしたいという幼い頃からの夢がかなった」と語り、馬が牧場で過ごす間に厩舎の掃除に当たっていた。

厳しい冬には苦勞も多いだろうが、今は馬も人も一番快適な季節。ここでは吹く風までゆつたり爽やかで、馬時間が流れていた。

文／浅井登美子 写真／満田美樹

- 浦河町企画課 ☎0146-26-9013
<http://www.town.urakawa.hokkaido.jp>
- 優駿ビレッジAERU ☎0146-28-2111
<http://aeru-urakawa.co.jp>

▶太田指導員の引率でホーストレッキングに出発する松嶋さん夫妻(上)馬との呼吸も合い、森の中を散策

ボランティアが続ける森や里山支援

「JUNON NETWORK」^{もり}「森の楽校」^{がっこう}「田畑の楽校」^{はたけ}

大学生協の呼びかけで平成10年に設立されたNPO法人JUNON(樹恩)NETWORK。都市と農山漁村をネットワークでつなぎ、深刻化する過疎問題や地方文化の再生に取り組んでいくと、母体となるNPO法人森づくりフォーラムと共に、地域を支える活動を続けている。「森林の楽校」と「田畑の楽校」。活動の拠点となっている二つのフィールドを取材した。

東京の森を蘇らせる

「鳩ノ巣フィールド」(東京都奥多摩町)

東京西部を走るJR青梅線。その終点に近い鳩ノ巣駅は四方を山に囲まれたのどかな風情の駅だ。駅舎を出るといきなりの急斜面が、本仁田山登山口に向かって北に伸びる。

6月早朝の日曜日。登山口とは反対の山裾に重装備の老若男女が続々と集まってきた。森づくりフォーラムの主催する「多摩の森・大自然塾鳩ノ巣フィールド・森林の楽校」のボランティア参加者41名だ。

大都会TOKYOは、(島を除く)その面積の30%が森林であることを、案外知られていない。水源涵養や再生可能な木材資源供給の場でもある森林は、都民にとってのかけがえない宝物である。

その森が荒れている。東京の山林の多くが存在する多摩地域では、後継者不足やシカな



▲鳩ノ巣駅前に集合した参加者たち。会が用意した道具を付け安全を確認しあう。森林業に精通したたくましいプロ集団である



▲手分けして作業。下草刈りは最も重要な仕事のひとつ
▼鹿除けのネットを設置する作業班



▲間伐や小枝払い等、会が長年手入れしてきた美しい杉林
▶杉の木の間伐作業。ロープを張り慎重に倒していく



▶初めて参加した人は河野礼美班長の案内で山を歩き作業の様子を把握する

どの被害により、荒れ放題の山が近年特に増えてきた。

「東京の森を元気にしよう」。そんな掛け声から始まったこの森林ボランティア活動は、回を重ねるごとに参加者を増し、その中から森林インストラクターのような専門家も生まれた。JUNON NETWORK(以下「JUNON」)では「エコサバーバー検定」という資格認定制度や「青年リーダー養成講座」などを設け、活動のリーダー育成にも力を入れてきた。

12年かけ、手を入れた山

作業に入る山は、手入れの出来なくなった所有者からNPO法人森づくりフォーラムが無償で借り受けたもの。12年かけて伐採、間引き、枝打ち、植林などを繰り返し、皆で手を入れてきた。5班に分かれた参加者は下草刈り、除伐、林道整備など、作業内容ごとのエリアに向かい、営林署の職員さんながらに急斜面での作業を開始した。

この日初参加は女性2名と男性1名。初心者の班は森林インストラクターの資格を持つ女性班長河野礼美さんの案内で、フィールド全体を歩き、おおよその作業の全貌を把握する。崩れ落ちた斜面に道を作り、間伐材で橋を渡し、伐採後の斜面に苗を植え、シカの食害防止用のネットを張る。枝打ちや伐採、下草刈りなどの本格的な山仕事をするために、林道や橋を作る等、沢山の仕事待ちを受けている。山林を育てるとはこういうことなのかと、実感する。

「3年前に植えたヤマボウシがこんなに見事な花を咲かせていますね」

後ろを歩く総括責任者・技術指導者の木村

裕明さんは、慈しむように山を眺め渡す。

学んだ技術は、その場で活かす

フィールドを歩き終えた初心者班は、次にナタとノコギリ、ロープの基本的な使い方を実践で学ぶ。指導するのは現場指導責任者の中嶋敏男さんだ。

杉木立の斜面で中嶋さんは一本の木にロープを掛け、引つ張るほど詰まってい、「いきしめ結び」というロープワークを実演してみせる。参加者たちは何度も試み、「いきしめ結び」を取得。次にはノコギリを使って丸太を伐る技術。ノコギリ、ナタと実習は続き、習得した技術を活かすため道作りの現場へ。

習ったばかりのロープワークで丸太運び、ナタで作った杭を打ち、滑りやすそうな斜面にしっかりとした道が出来た。初参加の若き女性2人も、満足のゆく達成感に笑顔を見せた。

ぶどう農家の応援隊

「はたけがっこう 田畑の楽校」(山梨県山梨市牧丘町)

JUNONのもうひとつのフィールドは「田畑の楽校」だ。この日スタップを含む18名の参加者は、果樹の郷で知られる山梨市牧丘町のぶどう農家「澤登農園」での援農ボランティアに向かった。

甲府盆地の東側。南斜面に広がる段丘一面のぶどう畑には、6月の風が爽やかに吹き渡り、「ぶどうの丘」に繁忙期が訪れたことを告げていた。4月に発芽したぶどうが葉を広げ、ツルを伸ばし、ぶどう棚を一気に緑に変えて

初参加班に加わった清水好博さんは実は3回目の参加。「林業実践の基礎知識を身につけたかった」という。「山国日本では木材を使うという基本があつて、林業が再生できるという道がある。森づくりは大事なんですわ、やつぱり」と清水さん。

この活動に7年間参加、他にも東北被災地へのボランティアを行ってきた。多摩川水源森林隊「や高尾の里山手入れなど幅広く関わる市川ノゾムさんのような人もいる。

この日炎天の空は参加者たちの背を焼き尽くしたが、万全の装備と体力保持に配慮したメンバー一行は元気に山を降り、沢のたもとで各自使った鎌やナタなどの道具を拭いて、油を差し、鞆に収めた。

森と人を繋ぐ、新しいネットワークの力強さ。その活動地域は東京のみならず東北、関東、西日本、四国、九州へと広がっている。



◀澤登農園のぶどう畑で剪定とジベ潰け作業をする参加者たち



▶「森の学校」、「田畑の楽校」に立ち会うJUNONの松本担当員

いく。これからがぶどう作り農家にとつては、気の抜けない作業の続く期間となる。人手が最も必要とされる時である。

「昔は集落の農家が互いに手伝い、段々畑の下の方から順番にこの作業をこなしてきました」と澤登農園の澤登浩二さんは話す。生産者の高齢化や後継者不足が進む現在、援農ボランティアの存在はありがたい。

澤登一治さん(72)さん・浩二さん(44)父子が経営する澤登農園は、2町歩程の畑にピオーネ、巨峰、シャインマスカットなど10種のぶどうを栽培している。一部がワインに加工される他、多くが生食用に出荷され、好評だ。この日の作業は伸びていくツルを最適な方向に誘引し、花穂と呼ばれる20cmほどの房状の花を、先端5cmほどを残して切り落とす剪定作業。養分を行き届かせ、より充実した実に育てるための大事な工程だ。

続いて「ジベ潰け」という、種無しぶどうづくりには欠かせない作業が始まる。剪定した花房をコップに満たしたジベリンという成長調節剤に漬ける。大変な根気と集中力を要する作業を、参加者たちは手馴れた動きで正確にこなしていく。

参加8年目、プロのような人も

作業リーダーの一人、橋本徳明さんはこのボランティアに参加して8年になる。年間を通してぶどうづくりを経験してきたが、「一番難しいのは、枝の剪定ですね」と、初心を忘れない。スタッフでもあり参加3年目の安部克枝さんは「農作業だけでなく、食べ物が美味しく景色も素晴らしいこの牧丘という地域



▲腕と首を上げての作業はかなりきついが、皆頑張ってる作業



▲ベテランのスタッフは作業がていねいで正確。澤登さんからの信頼が厚い

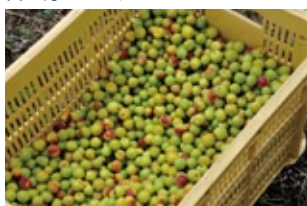


▲「お父さん」と親しまれている澤登一治さんが作業方法を説明
▼ジベリン剤(種なしを造るための成長調節剤)を用意する



▼3時の休憩タイム。円座で話かはすむ

▼澤登農園で採れた小梅。皆で分けて土産に



に惹かれています」という。「草も枝もほとんど伸びるこの時期の作業の大変さを、3年目にして実感。6月は毎週来ています」という安部淳一さんのような人もいます。都内や関東からの参加者が多い中、後藤祐さんは愛知県から2年目の参加、「生産者の方と一緒に作業で、農家の大変さを痛感しています」と話す。参加者の皆から「お父さん」と親しまれている澤登一治さんは、全体の作業を見ながらポツリと、貴重なアドバイスをする。世代の違いから、澤登さん親子に時々小さな食い違いが生じるのを、参加者たちは楽しそうに聞いている。頼もしい後継者が確実に育っているのを、感じながら。

JUONの援農ボランティアに、生産者の期待は大きいですが、収穫量や質を決める枝の誘引や剪定だけに、浩二さんは間違いは早め気づくことをひたすら心掛けています。8月9月の収穫時には更に忙しさはピークになる。参加者たちの期待や緊張もピークとなることだろう。これらのボランティア参加者スタッフ全体をまとめてきたのが、JUON NETWORK事務局の松本貴久さんだ。「生産者の人たちや地方を元気にしていくことが、僕らの目的です。今日も別の仲間とは和歌山県那智勝浦の棚田でお手伝いをしていきます」と松本さんは言っていた。

文／金山淑子 写真／満田美樹

●NPO法人
JUON(樹恩) NETWORK
☎03-5307-1102
http://juon.univcoop.or.jp/

産学官でオホーツク地域産業の創成を

東京農業大学・オホーツク実学センター ●北海道網走市あほしりし



▲東京農業大学オホーツクキャンパス。中央広場(右上、右下)と内部渡り廊下(左上) 学生が自由に使えるパソコンも数十台揃えた図書館(左下)

学生の5割が 首都圏から

網走市駅前からバスで約30分、女満別空港から車で20分、網走市東部地区、網走湖を眼下に見る広大な緑の丘に東京農大オホーツクキャンパスがある。手前に4カ所の駐車場とグラウンド、テニスコート、その先に中央広場を囲んでモダンな校舎が8棟建っている。外觀は明るい色のレンガ造りだが、内部に入るとコンクリートの肌を生かして自然光を取り入れたエコな造り。吹雪の冬に適応するため廊下を通じて

別の建物に往来できるようになっている。

東京農業大学は本部が世田谷、農学部が厚木にあり、オホーツクキャンパスは生物産業学部を平成元年に開校した。日本有数の畑作地帯である北の大地で生物生産・自然環境・生命を科学する「生物生産学科」、世界四大漁場オホーツク海域を科学する「アクアバイオ学科」、食品の加工・開発や香料・化粧品開発まで行う「食品香粧学科」、数々の体験学習



▲日陰干しするバラの花びら、ヨモギの葉



▲食品香粧学科。アルビオン化粧品と連携して研究が進められている

を基に地域活性化と地域経営の専門家を育てる「地域産業経営学科」の4学科がある。約1700名の学生が学んでおり、学生の約10%は北海道内の高校から来た学生だが、約50%は関東周辺の出身者で、自ら望んで来た学生が多く、卒業後はまた全国へ散っていく。「殆どの学生が北の大地への憧れと共に、長い冬も一人暮らしをする覚悟で来ています。そんな環境のせいかわる気を持ち真面目で勉強家が多い。教授の都合で休講でもすると文句を言うってくる学生がいるほどです。仲間や先輩後輩、教授等との交流も密です」と、今回の取材を手配してくれた実学センター学術研究員の佐藤孝弘さんが言っていた。

2号館入口近くで、学生が数人座り込んで作業をしている。見ると、バラの花とヨモギの葉を摘み取って並べている。これが同大学で人気の香りを学問する食品香粧学科の研究の一部であることが判った。

大学と地域企業が連携して商品等を共同開発したり大学が地域で調査研究、また学生が田舎で農作業を手伝う等の機会が多くなり、関東周辺では東京農大生が働く姿を各地で拝見する。北の大地に開校して26年たつ東京農業大学オホーツクキャンパス。同大生物資源開発研究所実学センターが5年前から開講、地域活性化を担う人々を育成して商品開発等をする「オホーツクものつくりビジネス地域創成塾」が注目されている。

▶同キャンパスが技術協力した地ビールや、学生が開発したジャガイモあんの大福
▼売店内で取扱っている東京農大開発商品。食品や加工品、グッズ等が並んでいる



「オホーツクビジネス地域創成塾」 社会人の商品開発や起業を支援する

オホーツク実学センターは生物資源開発研究所内に設立された研究機関で、地域コンソーシアムを形成しながら社会経験・現場経験を通じた実学を教育研究することをめざしている。「地域が学校である」を基本に、オホーツクの生物資源は実学研究テーマの宝庫であること、実学とアカデミズムの融合、現場経験が学力と人間力を高める、文理融合的な研究教育を図る、という理念を掲げている。

生物産業学部長でオホーツク実学センター

長の黒瀧秀久教授（農業経済学博士）が多忙な時間を割いて待っていてくれた。青森県深浦町の代々続く農家の生まれで、東京農大世田谷キャンパス勤務を経て、平成元年の学部創設からオホーツクキャンパスで教鞭をとっている。長年森林・林業問題に携わり『日本の林業と森林環境問題』や『流域林業の活性化と森林認定制度』等の著書もある。最近では北海道産の豊富な農林水産物を加工して商品価値を高める六次産業化の提案に取り組んでいるという。

実学センターと黒瀧教授が力を入れているオープンカレッジが、社会人向け講座「オホーツクものづくり・ビジネス地域創成塾」。平成21年4月に文部科学省の補助事業として開講、今年3月の第4期生まで計89人の修了生を送り出した。同講座で学んだ第1期生が中心になってNPO法人「創成塾」も設立され、地域で地場産品を開発する活動を続けている。塾長でもある黒瀧教授は、「資源を大いに活かして事業化や商品化することで雇用や所得の拡大にもなる。そういう人材、地域のリーダーになる人を育成する講座です。札幌から毎週通ってきた人もいました」と語る。地域資源や開発に関する学術的知識からビジネスプランの策定、商品マーケティングまで90分の講座を20回受けた後は、受講者は商品開発と販売提案をする。それに合格しないと修了証書を発行しないという厳しい講座でもある。

第5期創成塾の3回目になる講座（土曜日午後）をのぞかせてもらった。今年度から文部科学省に代わって大学予算と網走市の助成で、定員10名に対して12名が受講している。

テーマは「食品の衛生とリスク管理特論」で、食品香粧学科の宮地竜郎准教授が資料や画像で、各地の食品会社の事例を説明する。一番乗りでやってきた函館の障害者支援事業所代表の牧野喜代志さんは「専門的な資料ももらえて凄く勉強になりますので、無欠席をめざします」と言う。JRの

最終便できて前日の夜にホテルに泊るか夜行バスで来るという。女性も4名おり、熱心にノートを取っていた。

商品開発と言えば、東京農大オホーツクキャンパスと地域の連携で商品化されたものに、地元産の大麦等を使った豊饒な香りの網走地ビール、鮭・鱒の魚醤、マスせんべい、大福、ジャム、エミュー製品等々がある。地ビールの開発は各町村からの依頼が多く、スイートコーン、ニンジン、ナガイモ等を原料にしたビール・発泡酒も提案している。

東京農大食品科学科（現食品香粧学科）と実学センター編『オホーツク100のフードサイエンス』という興味深い本がある。昆布や海産物から生まれる数々の健康食品素材、規格外小麦やナガイモ等の有効利用、アイヌの保存食の研究等々100項目を、写真等を入



▶黒瀧教授（左）と、第5期創成塾の授業風景。法人、企業、個人に加えて自治体職員の参加もある

れてコンパクトにまとめた本で、オホーツクの食材の素晴らしさと、大学が地域と連携して研究開発に取り組んでいる様子を改めて知ることができた。

現場で学ぶ——農家と連携して

網走市の南西部音根内には「オホーツク網走第21営農集団」があり、7戸の農家が総計220町歩を耕作している。道路脇に農機具を収納・修理する大きな収納庫と事務所があり、向かいには初めて見る巨大なトラクターも2機収納されている。これらの農機具を共同で使用するために組織されている営農集団だ。一带はビート、小麦、大麦、馬鈴薯等が見渡す限り栽培される美しい大地で、東京農大生の実習の場でもある。また、収穫期には学生がアルバイトで働く農地でもある。

ここでアルバイトするという地域産業経営学科3年生の二人の女子学生に案内してもらい、農家の代表として安達耕平さん(31)にも来ていただいた。結婚して2児の父親でもあるという。

平野涼香さん(地域産業経営学科3年生)は静岡県出身。「祖父母が稲作等の農業をしていたので小さい時からよく手伝った。そのため農業関連の仕事をしたいと東京農大を受験し、オホーツクキャンパスを選びました。暇があると旅を楽しみ、ほぼ全道をまわりました」と言う。卒業後は札幌市以外の、目の前に田畑がある場所のホクレンで働きたいという。

大井綾さん(同)は群馬県前橋市の出身。高崎市には東京農業大学第二高等学校があり、同高を卒業して東京農大を受験、オホーツク

キャンパスを望んで来た。「環境がとてもよく、快適な学生生活です。ただ今年のように5月に雪が降るとこたえますが。卒業して農業にどう関わるかはまだ未定です」と言う。車を持つているので皆から重宝されている。

学生たちから兄貴のように慕われている安達耕平さんは、32haの農地でビート、加工用ジャガイモ、大麦・小麦、ナガイモ等を栽培。大麦は東京農大と研究開発してビール用に栽培している新種だという。麦畑の美しさは格別で、心地いい風の音も聞こえて来る。

安達農園ではナガイモの定植前に平野さん等を草取りのアルバイトで雇った。学生にとって時給千円、一日一万円になるいいアルバイトのようだ。「農作業は殆どが機械化されていますので、学生には秋の収穫作業以外は、春夏に一、二回草取りをお願いします。広いですから一度に4、5人は必要です。今の学生はとても真面目ですね」と安達さん。

安達さんのナガイモ畑へ案内してもらった200mの長さのワイヤが上下左右にピンと張られた近代設備で、ワイヤに沿って植えた苗木が競争し合って伸びはじめている。

梅雨のない北海道は雨が少なく日中の気温は30度近くになることもある。私がこれらの農作物を見ていつも感動するのは、肥沃な土壌とはいえ、水分の少ない過酷な条件の中で植物は太陽をめざして伸び、地中にしっかりと根を張り、実を作っていくということ。逆に過酷な条件がいい農作物をつくるということ。学ぶ。農家の英知と植物の逞しさが北の大地を造形していると改めて感じる瞬間であった。

文／浅井登美子 写真／満田美樹



▲小麦畑で、左から平野、安達、大井さん
▲左上／ネットを張ったナガイモ畑で
左下／第21営農集団の農機具収納庫の前で、安達さん

●東京農業大学オホーツクキャンパス
オホーツク美学センター ☎0152-48-3889
<http://www.bioindustry.nodai.ac.jp/>

平成25年度
過疎地域自立活性化
優良事例

【おくやはぎ
奥矢作森林塾】

●岐阜県恵那市えなし

民家は地域資源、リフォームして定住促進へ

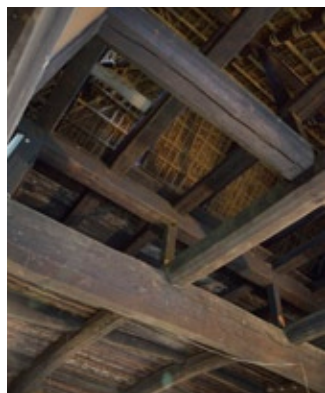
NPO法人「奥矢作森林塾」が開催する「古民家リフォーム塾」は6回目を迎え、今年もまた多くの塾生がやってきた。一泊二日の全10講座。古い家を再生する地味で根気のいる作業だが、参加者は遠く関東一円から出かけてくる。大島理事長や三宅棟梁、仲間に見えることを喜び、黙々と働き、夕食の当番もする。夜は囲炉裏を囲んで語り明かす。奥矢作の自然と人の魅力をたっぷり味わう二日間だった。



▲矢作川上流の景勝地にある奥矢作レクリエーションセンター



▲今回リフォームする古民家「申原郷土館」。塾生が集合して作業開始



▲土間から茅葺屋根の貴重な木組が見える



◀「僕たちが学んだ小学校だよ」と語る三宅棟梁(左)と大島理事長。二人は何事も助け合ってきた同窓生だった。校庭の大銀杏の木の前で

6月中旬の土曜日、午前9時。奥矢作レクリエーションセンターの校庭には、各地からやってきた車が停まり、「古民家リフォーム塾」に参加する人たちが集合した。20名はいようか、中高年の男性が多く見られるが、女性の姿も3人程見られる。第6弾目となる本年目のリフォーム塾は5月24日に開校、今日は2回目にあたるため、参加者はヤアヤアと再会を喜びあっている。主催する「奥矢作森林塾」の大島光利理事長(69)と端博美事務員から簡単な説明を受けたあと、早速車に分乗して今回リフォームする申原郷土館へ向かった。

奥矢作レクリエーションセンターは矢作川上流の風光明媚な自然の中にある元小学校。テニスコートや体育館があり、校舎は整備されて

ダムで消えた地区の郷土館、再生に夢を託して

宿泊施設になっている。ここから車で約10分程のところに串原郷土館がある。ダム湖になっている矢作川を見下ろす場所、木々が茂りベンチ等を配した広い公園に整備され、道路を挟んだその上段に古い民家と土蔵が建っている。鉄板で覆われた茅葺屋根の木造家屋で、「串原村郷土館」と書かれた古い看板がある。中に入ると広い土間があり、吹き抜けになった天井には丸太で萱を組んだ先人たちの技が見て取れる。土間の右手に板張りの部屋が4室ほどあり、1回目の塾日に資料等は一か所に集められた。今日は古い板張床を取り除いて新しい床に張替える作業が行われる。

串原郷土館は昭和43年に矢作ダムが出来た時、ここに移築された。江戸時代に建築されたこの地方で最も古い木造家屋だが、長い間「開かずの家」だったという。

朽ちかけた床をはがすと、カビ臭い匂いが立ち込め、支えていた古い木が現れる。マスクと軍手が欠かせない。除去した板を外に運び出し、床土を整備して新たに土台石を配するのが午前中の作業。午後からは、土台石の上に丈夫な木を立ち上げ、そこに支えの床材を水平に張っていく。12畳ほどの部屋の床を一寸の狂いもなく真っ平らにするために神経を使う作業だ。それが終わると、用意された床材を張っていく。杉板の香りがする見事な床に変身した。

土間に立つて指導に当たっているのが棟梁の三宅律夫さん(60)。串原の殆どの家を手掛けてきた人で、大島理事長の片腕として塾の運営を支えている。大工作業に必要なかなづちやのこぎり等は棟梁が持参、本職の大工仕事

の間に改築に必要な木材の手配等もしている。いつも先頭に立つて作業をするのが大島理事長。元消防長だったというが、家一軒の建築を任せられるほどの腕前で、頼りになる人だと塾生達の信頼が厚い。

作業は、毎回参加している人は新人の指導にも当たるが、「今日で二回目」と言う人も慣れた手つきで釘打ちをしている。腰には大工道具一式を入れた革ベルトをしており、普段から日曜大工を楽しんでいる様子だ。反対に、打った釘がいつも曲がってしまう若者もいて「根性は曲がっていないのですがね」と苦笑

しながら作業。あとで拝見したら、素早く真つすぐに打てるようになっていた。初日は皆の作業を見ているだけだった初老の女性も、翌日は釘打ち作業に参加、「楽しいです」と紅潮した顔で語っていた。

古民家は地域の資源、再生して活用を

岐阜県の南東部に位置する恵那市は長野県と愛知県に接し、市街地の北部を木曾川、南部を矢作川が流れる美しい自然郷。平成16年に6市町村が合併、奥矢作森林塾のある旧串原村は恵那市の最南端に位置し、矢作川を経て愛知県豊田市に隣接している。面積は38.22km²、80%が山林で、842人302世帯(平成26年3月現在)が暮らしている。昭和40年に矢作ダムが出来たため、釜井集落の59戸が移転した。愛知県民の水がためであり2つの発電所を持つ矢作ダム。串原はその上流にあたり、緑が色濃く散策に最適な山林地帯だが、北側には平坦で豊饒な田園が広がっている。



▲郷土館の床をはがすと太い支え木が現れた。さらに支柱を支える石を並べて新たに床板を張っていく
 ▲水平に支柱を張ったあとは、杉板の床を寸分の狂いなく敷いていく



木造の大きく堅牢な二階建家屋が多いのは、農林業の他に大規模な養蚕農家があった名残りで、大島理事長は「ここは古くてもいい材で作った家が多い。リフォーム塾は地域資源でもあるこれらの家屋を再生して地域の活性化をはかりたいとはじめました」と語る。

奥矢作森林塾が最初にリフォームしたのは集落の丘に建つ古民家であった。樹々が茂る無人の家だったため改装には2年かかったが、蘇った家は「結いの炭家」と名付け、中央に囲炉裏と新たに近代的な台所を配して、塾生の宿泊場所や田舎暮らし体験施設として活用されている。

大島さん達は、現在リフォームしている郷土館に、観光客も利用できる小さなカフェを設置する計画だ。そこへ朗報が飛び込んできた。奥矢作湖は飲用水として利用するために、今までポット一つ持ち込めなかったが、使用許可を依頼していたところ、モーター機能がないカヌーの使用が許可されることになったという。

休憩時に「4 km以上ある湖で今夏はカヌーを漕ぐ姿が見られそうです」と大島さんが報告すると、拍手と歓声があがった。

奥矢作森林塾の職員・端博美さんは、皆に用具を配ったりお茶の用意をしたりと、実によく働き、合間には作業状況をカメラに収めている。実は森林塾のお知らせや報告等のホームページは端さんが制作して配信しており、ホームページを見て参加する人が8割を超えているとのこと。「ホームページで見たと問合せがあり、一度来てくれた人は仲間が出来たと、その後もよく参加してくれます」と端

さんは嬉しそうに語る。名古屋からIターン、ご主人は技術者で豊田市に通勤しているが、日曜日にはリフォーム塾を手伝いに来ていた。

森林塾に毎回のように通ってくるのが第4期生の国井雅雄さん(64)。東京・代官山の生まれだが現在は千葉県柏市に住み、いつもマイカーで寄り道を楽しみながらやってくるという。

「ここは豊田市と長野県に隣接、恵那市は交通も便利な場所。串原は豊かな自然が溢れるエアポケット。人の手が入っていない自然や昔ながらの風土が残っています。それ以上に素晴らしいのは魅力的な人々がいることです。大島さんは何でも出来る達人だが、驕らず、どんな人にも親身に相談に乗っている。三宅さんもそう、腕のいい大工で仕事が多忙なのに、素人の工作教室に付き合ってくれています。だから皆串原が好きになる。集まってきた人は趣味や考え方が似ているせいかな、かけがえない仲間になるのだね」

夫婦で初めて参加したのは岐阜県山県市からきた本庄宏・聖美さん。神奈川県から移住して山県市の地域おこし協力隊になったのを機に民家の改修を学んでいる。

栃木県足利市からはじめに参加した母と息子さん。「息子は化学品アレルギーで新建材の家に住めないため、奥矢作の古民家に住みたい」と模索中だ。

中には古い家には住みたくないが串原の自然と村人が好きだと三重県から来る羽紫雅一さん(63)のように、

▼皆で改装した囲炉裏のある居間に全員集合して夕食の宴。地元野菜もたっぷり並ぶ



▲3時の休憩タイム。塾生から初ものの桃が差し入れられた



▲毎回参加する国井さん(右)
▼竈で夕食のご飯を炊く男性たち。「おこがまた旨いんだ」



地域の草刈りや清掃の日にもボランティアとして来てくれる助っ人もいる。

一回の参加費は2回の昼食、夕食、朝食代で一人3,000円。食費の材料費も出ないと心配だが、「大丈夫、ここを第二の故郷にしてくれることでいいんです」と大島さんは言う。この森林塾を通して現在までに10世帯、28人が移住してきている。人口842人の串原地区にとって、大変な朗報である。

里山で念願の田舎暮らし

古民家に移住してきた人を見ると、大きな屋敷で陶芸をする安達和治さんをはじめ、地元的女性と結婚して養鶏所で働く人など多数おり、殆どの人が古民家リフォーム塾に参加している。まずこの地区が好きになること、そこで古民家を購入する。その上で大島理事長と相談して、リフォーム塾が改修を手伝うことになる。

畑で草刈りをしていた本田正次さん(60)は、知多市からリフォーム塾に3年通い、手頃な民家があったため移住を決めた。「畑仕事をしたいと思っていました。家は持ち主が出たと同時に購入しましたので、改修も少なくすみました。ご近所の耕作しない畑を借りて野菜栽培をはじめましたが、害虫や雑草との闘いですね。ミニハウスも借りました。来年は田圃も借りたいと思っています」

奥さんと移住してきたが、最近会社を辞めて息子さんも引越してきたので、農業を本格的にやる覚悟だ。暇をみては道路脇の草刈りもするため、近所から喜ばれている。

串原地区の中心部に近い丘の上にひときわ

目を引く二階建て家屋。丘に建つ家までS字に私道が開設され、周辺には石垣や草木が美しく植樹されている。山林と原野を造成して新居を建築したのは戸田正さん(64)、淑子さん夫妻。定年後は田舎暮らしがしたいと早くから各地を見てきたが、串原地区の田園と古民家が調和している里山風景が気に入った。三人の子供も独立、夫妻の実家(ご主人は春日井市、奥さんは名古屋市)にも比較的近い。戸田さんが求めてきたのは、山林と畑や田圃に囲まれていて農作業が出来る場所に、二人の夢を形にした家を建てること。大磯にある家屋敷を売り、山林700坪付きの農地と宅地を購入した。当時は山林原野だった場所で、全部で1400坪もある。

そのための準備・実現には奥矢作森林塾の大島理事長の努力があったと戸田さんは言う。「ここに住むためにはまず地域と関わるのが大切。古民家リフォーム塾や稲作体験イベント等に参加した。土地の購入では大島さんに大変お世話になりました。4人の地権者がいたので、地元の信頼出来る方の紹介が必須でした」

造成するための費用は莫大だった。森の一部を削って宅地にする際に出た土は、幸い隣接する畑の持ち主が農地をかさ上げするのに使ってくれたという。

丘の下からみた家は白亜の御殿のように見えたが、実際にはシンプルで機能的な造りである。玄関を入ると戸田さんが工作等を楽しむための広い作業場があり、中央にはだるまストーブ。ストーブの熱で2階の書斎も暖房がいらぬ程だという愛用品だ。山林の一部

を削って宅地にした時に出た杉丸太は丁寧に割って軒下に並べられ、さらに山へ入っては小枝を払い、それも整えて燃料に使っている。室内は家具、木造りの壁、ドアに至るまで淑子さんのこだわりが生かされた素敵に住まいである。それにも増して夫妻のお気に入り、景色だという。東と北は広い庭とその先に市街地が一望でき、南は杉林、西には青田とその先に鬱蒼とした山々。まさに四季折々の里山の美観が楽しめる家である。

手入れされた畑にはナスやトマト等がたわわに実り、几帳面な戸田さんの人柄が伺える。今年から近くの水田を借りて稲作も始めた。地域農業の担い手になりたいと戸田さんは一生懸命である。(文/浅井登美子 写真/小林恵)

●NPO法人 奥矢作森林塾 ☎0573-52-2217
<http://shinrinj.enat.jp/>



▲広大な敷地に建つ戸田さんの新居。右手にある山林から切り出した間伐材や小枝はきれいにカットして薪用に使う。東方には重厚な民家が建つ集落が一望できる
▶木の香と温もりに溢れる室内。東京芸大を出て家具会社で大工をする娘さんと、調度品一つにもこだわる奥さんの嗜好が各所に反映されている

▲畑で草刈りをする本田さん、裏手の家に住む。野菜には消毒しないためビニールを張ることにした

▶島で根を張りたいと地域おこし協力隊員でUターンした遠藤裕未さん

大正年間、桜島噴火で避難した人々が種子島・中割地区の開拓地で栽培を始めたという生姜。他からの移住者も増えて大きな集落になったが、やがて過疎化で小学校も廃校になった。しかし、種子島育ちの島っ子が地域おこし協力隊で中割地区に来たことで、高齢化した地区に奇跡が起きた。休耕地で生姜を栽培、休校した学校を作業場にして、伝統の生姜生産地に再生しようという提案。平成24年には区長を代表理事にした一般社団法人「なかわり生姜山農園」が設立され、地区のお年寄りたちが協力して無農薬栽培と健康食品・生姜加工品製造に取り組みはじめている。



平成25年度
過疎地域自立活性化
優良事例

生姜栽培を復活して、開拓魂を受け継ぐ

「なかわり生姜山農園」

●鹿児島県西之表市にしのおもてし

鉄砲伝来とロケットの島として知られる鹿児島県種子島。島のほぼ中央の高台にある西之表市中割地区は、桜島が大正3年の大噴火を起こした時、家や生活の糧を失った桜島島民が移住した集落である。原生林だった土地を開墾し、畑を切り拓いた。移住した年の晩秋には、児童156人が学ぶ鴻峰尋常小学校を開校するまでの集落になった。畑の作物としてサツマイモや菜類を作る中で、生姜の生産が盛んとなり、中割地区は、他の集落から「生姜山」と呼ばれるほどになった。

その後、中割地区には徳之島や沖永良部島、奄美大島からの移住者も増え、昭和33年には1000人近くの人口になるが、その頃をピークに人口は減り始め、平成13年には鴻峰小学校が休校となり、生姜を作る人もいなくなり「生姜山」の地名だけが残った。

そこに西之表市が採用した若い地域おこし協力隊員二人が移住してきたことで、高齢者ばかりの集落に変革が起るようになった。

島っ子、Uターンして 生姜作りを提案

今年6月に廃校が正式に決定した鴻峰小学校の正門は、子ども達が通っていた当時のように、小さな花壇にピンク色の花が咲き、南の島特有の暖かく湿った空気が流れる校庭は、濃い緑色の樹木が茂っていた。家庭科教室を



▲農園代表理事を務める奈尾正友さん
▶作業場に活用している旧鴻峰小学校は草花が咲き木々が茂る楽園
▼第2農園で栽培中の生姜、収穫は8,9月から



覗くと、頭にネットを被り、ゴム手袋をした高齡の男女三人が、一心に加工用生姜の皮を剥いていた。

地域おこし協力隊の二人は、耕作放棄地で「生姜山」の地名の由来となった生姜を作ることを住民に呼びかけ、平成23年に区長を始めとする数人で、休校中の鴻峰小学校の校舎を拠点として「なかわり生姜山農園」を結成。6畝の畑で生姜づくりを始めた。翌年には、区長を代表理事にして一般社団法人としたのだ。

隊員として、中割地区に入った遠藤裕未さん(37)は、中学生まで種子島で育った島っ子だ。そのため島の存在がいつも気になっていて、数年前から島の海水浴場で海の家を経営するなどの繋がりを持っていた。海の家から見える馬毛島に空母の離着陸訓練施設を建設する問題が起こった時には、人ごとと思えず「根を張るなら島で」と考えた。

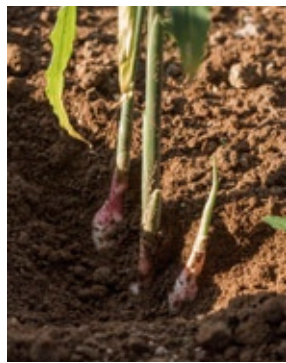
そんな折に地域おこし協力隊の募集を知って応募。運良く採用になったことで、彼女の人生は島へさらに大きく舵を切ることになる。もう一人の隊員である新畑幸一さんは、家族3人で中割に赴任してきたデザイナーだ。事情があつて任期を終えて本土に移住したが、遠藤さんは、「自分は、企画は得意だけど、発信は苦手。新畑さんのデザイン力があつたから短期間で良い発信ができたんじゃないか」と、強力な味方を失ったことを惜しむ。

70歳からのボランティアバイト 「古のしょうが伝説」を復活

家庭科教室で生姜の皮を剥いていたのは「70歳からのボランティアバイト」と呼ばれる1時間500円で働く地域のお年寄りだ。生姜をジャムや紅茶として加工することが、地元雇用役に役立っている。



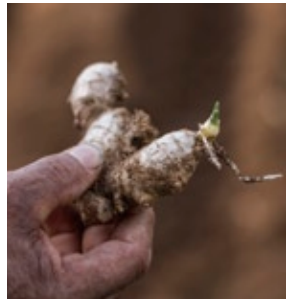
▲皮むき処理した生姜



▲2ヵ月後に収穫する生姜



▲昔話をしながら皮むき作業



▲生姜の新芽



▲健康食品として人気の生姜紅茶(右)と乾燥生姜



▲さっぱりして美味しい生姜ジャム

「生姜の皮の剥き方は難しいね。でも、70歳も過ぎてからの仕事は、こういう仕事は丁度良いね。時間も短くて。昔難儀したことなんかを、皆と一緒に話しながら仕事するから楽しいよ」と、島美代子さん(77)。一緒に仕事をしていた島トキエさん(85)は、自分で作ったミニトマトと黒砂糖を持って来て、仕事が終わった後のお茶の時間に「こんとマトを食べてみれ、美味しかるが。こん砂糖舐め、美味しかるが」と、皆に勧める。一番の若手戸畑久志さん(64)は、「この年寄りを見本にして頑張らな」と、美代子さんとトキエさんのパワーに圧倒されていた。

一般社団法人となった「なかわり生姜山農園」は、社員が8人。その内の3人が理事。全員合わせて6反ほどの畑を作っている。現在、代表理事を務める奈尾正友さん(66)が、生姜山農園の設立時に書いた「生姜山実行委員会設立に寄せて」という一文がある。



▲加工を担う島美代子、島トキエ、戸畑久志さん

▶文化施設「月窓亭」(左)で「月窓茶」について打合せをする遠藤さんたち



「学校は休校となり、地域は疲弊の度を増し、もはや限界集落とまで言われるようになっていく。でも、天はまだ中割を見捨ててはいなかった。(略)100年の時を越え、今ここに古のしょうが伝説を復活させようと私たち校区民は立ち上がった。」そして最後に「本事業を中割区100年の大計と位置付けたい」と結んでいる。「なかわり生姜山農園」に対する地域住民の切実な期待が伝わってくる格調高い声明文だ。

奈尾さんは、3歳の時に徳之島から両親に連れられて中割地区に入植した。「生まれながらにして父の背を見てきましたので、公務員の勤めを続ける傍らで、親父の努力を、それで終わらせたくないと、強い思いがありました」と言う奈尾さんにとって、生姜山農園の試みは、「そういう機会を待っていたという気がします」と、協力隊の提案が、まさに啖啄同時の地域おこしとなったのだ。

簡単にはいから価値がある

さて、生姜山農園結成からわずか2年後の平成25年には、全国過疎地域自立促進連盟から優良事例として会長賞を受けるなど、順風満帆の滑り出しに見えるが、幾つかの課題を抱えるのも事実だ。

第一は、生姜を有機無農薬栽培で作るため収量が上がらないことと、生産者によって生産品にバラツキが出ることが悩みだ。当然、除草剤は使わないので、雑草を一本一本抜き取る労働は厳しい。社員として一緒に生姜を生産する地元農家が増えていかなない理由の一つにもなっている。勉強会をし視察にも行っ

て、品質の向上を図るが、長年自分のやり方で農業を行ってきた社員の意識が変わるには時間が掛かりそうだ。

社員の一人田仲勇さん(69)が、自分の畑で栽培している生姜の畝を耕していた。「追肥をするための準備ですわ。土作りで牛糞をやっているから、追肥は鶏糞と活性水をやらんといかん。根を丈夫にしますからね。農薬は使われんから、毎朝、虫を見つけたら一匹一匹取るしかないから。今からは台風、暴風雨対策やな。何ごとも簡単にはいから。簡単にいきや、値打ちは無かごとあるな」。

田仲さんは、苦労は当たり前と言う。

生姜山農園が管理する第2農園では、8人の社員がそれぞれの畝を担当して生姜を作っていた。その中で、田仲さんが担当する畝には、草一本生えていない。しかし、遠藤さんは畝の草も早刈対策には重要と考えている。昨年は小雨の夏で、ある程度草を取っていなかつた畝の方が出来が良かったのだ。しかし、田仲さんは「草も同じ肥やしを取る訳だからな。草を置いといたら来年には何千倍にもなる。百姓に草は大敵」と、苦労を厭わず一本も残さず草を抜くことを良しとしている。

加工する原料となる生姜の生産量は上がらず、品質にもバラツキが出ているため、「出荷できる量が限られるじゃないですか。一気にどーんと捌けるような営業は難しい」と、遠藤さんは運営の前途に不安を抱えてはいるが、新しい展開も見えてきた。

地元西之表市の文化施設で観光施設でもある「月窓亭」からの依頼で、種子島では一般的に飲まれている月桃茶を、ハーブティとし



▲農園社員の田仲勇さんと草一本ない生姜畑



て「月窓茶」の名で新しく売り出すための製造とパッケージの製作依頼があつたのだ。生姜ではないが、地元の月桃の葉を使った新しい事業は、次の可能性を予感させるに充分である。



▲「月窓亭」の名にちなんで発売されるハーブティ「月窓茶」

「畑の土づくりは、5年10年のスパンで考えないと」と、長期戦の構えを崩さない遠藤さんは、今年11月に初めての出荷を予定している。地元根ざしてゆつたりと構える自らの人生と「なかわり生姜山農園」の活動を重ね合わせることで、地元の信頼は一層深くなり、今抱えている課題は自ずと解決していくことだろう。

写真・文 芥川仁

●雪浦ウィーク実行委員会
長崎県西海市大瀬戸町雪浦下郷1292番地
☎0959-22-9305
http://yukinouraweek.com



▲今年からはじまった雪浦ペーロン保存会
若手メンバーによるペーロン体験



▲今年4月にオープンした「ターン者」によるイタリアンカフェ「秀一樓」。入場待ちの長い行列が出来た



▲自然と暮らす「ぐりーん」 自然素材の焼き菓子販売で人気

アート・手作り品・イベントでもおもしろい 「雪浦ウィーク」 ●長崎県西海市さいかいし

日本の西の果てにある西海市。角力灘に沈む美しい夕日を眺めることのできる雪浦地区に、ユニークな地域おこしイベントがある。今年で16回目を迎えた雪浦ウィーク。毎年ゴールデンウィークに4日間行われ、観光地ではない人口約13000人の地域に、期間中1万人を超える人々が訪れるイベントに育った。当初、13店舗だった店舗数も今年は30店舗となった。来訪者は、地図を片手に雪浦を散策しながら各店舗をめぐる地域回遊型イベントとなっている。

雪浦の海、山、川の豊かな自然に魅せられて、平成の年になった頃、イターン、Uターン者が少しずつ移り住んできていた。青年海外協力隊OB、陶芸家、絵描き、音楽家など面白い仲間達である。また、地元にもユニークな仲間がいた。ここには都会にはないいいものがある。豊かな自然、田舎の暮らし、産物、人。移住組が仲間と呼びかけ、地元の人達を巻き込んで一緒に作って作り上げたイベントが「雪浦ウィーク」である。

ここでの暮らしを紹介し、訪れる側、迎える側、双方が共に楽しめる、顔の見える交流をしよう。平成11年の夏、雪浦を一週間解放しようとして「第一回雪浦ウィーク」を開催した。地域住民が行政に頼ることなく、自主運営するイベントとして、メディアも快く取り上げてくれた。友人が友人を呼び、そしてリピーターを生み、雪浦という地域の知名度は県内外に広がっていった。

運営は実行委員会が行っているが、行政、学生、地域住民、企業など、県内外の様々な方々がボランティアとして、運営をサポートしてくれている。

16回目を迎えた今年には特に、地元の若者たちが主体的に動き始めた。ペーロン漕ぎ手の若者たちだ。雪浦ペーロン保存会を動かし、体験ペーロンが新しいイベントとして加わった。雪浦川にペーロン船が鐘の響きとともに走り、新たなウィークの風物詩となった。また、地元20代の若者たちの新しい店舗が2店オープンした。願ってもない動きである。

そして、学習の一環として、毎年参加してくれているのが、雪浦小学校の子供達である。今年も手作りケーナの演奏や、合唱をして雪浦をめぐり、街角ライブをしてくれた。来訪者の心が和んでいくのがわかる。前述の20代の若者たちは、小学校の時に雪浦ウィークを楽しんで育った若者たちでもある。

子供たちの演奏に感動した来訪者から、雪浦小学校に手紙が届いた。佐賀県の方だ。みなさんに一言お礼が言いたくて、とあり、「友人から雪浦ウィークの話聞いて是非行きたいと思いました。ケーナの演奏が聞けると知って、その日にどうしても行かなくてはと出かけました。雪浦に到着して見回すと、ちょうど学校に戻ろうとしていた皆さんと会えたので、声をかけてしまいました。そうしたらどうでしょう、私達の目の前で『コンドルは飛んで行く』を全員で演奏してくれました。大変感動しました。そのあとの体育館でのコンサートも素晴らしいかったです。そしてその様子をやさしく見つめるまちの方々の表情もとても素敵でした。私は、雪浦という町の大ファンになってしまいました。(省略)」と結ばれていた。

昨年は、全国過疎地域自立促進連盟会長賞を頂いた。シンポジウムで他の団体の皆さんの発表を聞いて刺激を受け、私達ウィークメンバーにも気合が入った。ウィーク期間中の新企画を実行。年間を通じた地域活性化を目指す新プロジェクトも企画、進行中。4月に移住者がカフェをオープン、7月にはデザイナーの若い家族が移住してきた。すでにウィーク仲間としてプロジェクトに参加している。雪浦は今年も面白くなりそうだ。

(雪浦ウィーク実行委員会会長 渡辺美佳)

地域の心を一つに、菜の花によるまちづくり

「寄ろ会みなまた」

●熊本県水俣市
みなまたし



▲「おれんじ鉄道」の周辺に栽培される菜の花畑



▲生育を良くするための新芽摘み



▲刈り取った種をサヤから落とす作業



◀菜種を収穫する子供たち

●寄ろ会みなまた
水俣市教育委員会生涯学習課内
☎0966-61-1639
http://www.city.minamata.lg.jp/

「寄ろ会みなまた」(世話人代表/下田国義氏)は水俣病により長年疲弊してきた地域コミュニティをもう一度作り直すために平成3年に発足した。「ないものねだり」から「あるものさがし」への転換を活動テーマに、地域住民自らが話し合い、心を一つにしなが、地域資源の再発見と活用、環境に配慮した地域づくりを行ってきた。

当初は水俣市教育委員会生涯学習課の指導

で、「地域資源マップ」「水の経路図」「地域人材マップ」等を制作、各地区のリーダーの養成と地区の「あるものさがし」等に当たってきたが、会員の発案と呼びかけで、平成17年より「菜の花によるまちづくり」がスタートした。

休耕地を利用して菜の花を植える、菜種を採って菜種油を作り、廃油で石鹸やろうそくを作り、搾りかすは肥料にするという環境保

全活動でもある。学校も協力、子供たちと保護者が大勢参加するようになり、各地に美しい菜の花畑が登場した。刈り取りやサヤから種を出す作業にも子供が参加し、菜種油は学校給食で使用される。そして廃油で作ったろうそくは、水俣病で犠牲になった人々へ祈りを捧げる「火まつり」で灯される。

「寄ろ会」の活動に関心を持つ子供や親が増えたことから、メンバーの意欲も高まり、地域の美化や休耕地を生かした新たな取り組みも始まっている。現在「寄ろ会」には23地区、約100名の会員がいて、月一度はリーダーを中心にした会議が開かれている。

菜の花によるまちづくりの他に、カボチャを栽培して地区祭りに料理して提供する山間部地区、商店街に花壇を設置して花で賑わいを演出する市街地区などがある。

新しい活動としては、休耕地に大豆を栽培して、収穫した大豆で豆腐作りをしようと計画している地区もある。この大豆栽培では、小学校が土曜日に校外授業が行われるようになったことから、小学3年生が農家の指導で月一回畑仕事を手伝っている。収穫した大豆は文化祭の時に豆腐を作って皆でいただくことになっているので、大人も子供も一生懸命とのこと。大豆栽培が軌道に乗れば「寄ろ会・手作り豆腐」が登場するかもしれない。

「寄ろ会みなまた」は市民と行政が連携した「環境にやさしい暮らし円卓会議」にも協力してさまざまなアイデアを提案、円卓会議から、からも栽培と焼酎の商品化もはじまった。

結びなおされた新たなコミュニティの輪が、数々の成果を生み地域活性化をもたらしている。何よりも嬉しいのは、未来を託す子供たちが地域に関心を持ち、活動を支えてくれることだと関係者は言う。

島は魅力溢れるイベント会場

「若松ふるさと塾」

●長崎県新上五島町
しんかみこうちょう



▲漁船、ボート数隻を使って無人島を目指す「無人島体験」



▲漁船では通れない狭い瀬戸を小型ボートでスリリングに



▲潮だまりで、さまざまな海の生物をGET!

●若松ふるさと塾
長崎県新上五島町稷津郷491
☎0959-46-3591(でんきのアクト内)

新上五島町は五島列島の北部にあり、中島と若松島を中心に7つの有人島と60の無人島から成っている。町の南西部に位置する若松地区は、海と山の豊かな自然に恵まれた6つの美しい有人島で、島の大部分が西海国立公園に指定されている。

この若松地区を、いきいき元気な町に、住んでよかった、一度は出て行つても帰つてこようと思えるふるさとにしようとして設立されたのが、地域活性化グループ「若松ふるさと塾」。

年間を通して、地域の人が参加して交流を深めるイベント、また観光客も来島したくなるような観光・物産の祭りなどを企画運営している。

「若松ふるさと塾」の歴史は古く、昭和62年に開催された長崎県主催の「上五島地域島おこし大学」に参加した受講生6名の若者が中心になって設立された。同様のグループは5、6団体あったが、活動に対する町からの補助金がなくなつた時点で消滅してしまつた。それに対して若松ふるさと塾は、会員のボランティア活動と地区住民の協力で27年間継続して地域に根ざした活動を行い、高い評価を受けている。

現在会員は15名。設立当時のメンバーは50代の中堅になり、地域の産業発展の要になっている。企画立案はベテラン会員が、準備や現場での指導等は若い会員たちが中心になつ

て活動している。20年以上塾長を務めてきた荒井純次さん(58歳、「でんきのアクト」代表)は、若松ふるさと塾の事務局をそのまま会社内に置き、代表を深浦孝司さん(39歳、自動車整備会社勤務)に譲つた。女性メンバーも2名、さらに会が行う行事をサポートする地域住民の協力体制も整ってきている。

若松ふるさと塾主催のイベントを見てみると、例えば4月は若松小学校グラウンド上空を住民から寄せられた鯉のぼりが数百枚舞い、5月連休には子供と保護者たちによる「無人島体験」。美しい海で泳ぎ、海辺の生き物観察をした後は、薪や流木を拾ってきてサザエご飯を作つて食べるという行事で、無人島体験は夏休みにも子供会で実施される人気行事の一つになっている。

夏はお盆に帰ってくる人や観光客も来島して盆踊りや花火、夜店で賑わう「サマーフェスティバルinわかまつ」、そして秋10月には子供たちの「わんぱく相撲大会」、11月には島内の特産品や鮮魚等が一堂に会する「どてらい市」。この日は子供たちの餅投げ大会、天然鯛他が当たる抽選会等もあり、島外から来る人も多く、大賑わいする。どてらい市を受けて、4月からは月一回朝市が開催されるようになり、地元の特産品や手作り品開発にも弾みがついた。そして12月には、親たちに代わってサンタに扮した会員が子供たちにプレゼントを届ける等、年間を通じて活動している。

他に話題になってるのが披露宴のプロデュース。島外に出て結婚した人が親や仲間を紹介したいと相談されたことから始めた。会では今後さらに、町にある宝ものの発掘とそれをどう最大限に活用できるか、元氣な町づくりをどう持続していくかを模索している。

かつては昼食に食事する店がなかったという山都町だが、そんな人を農家が自家製の手打ちそばでもてなしたことから、「宮古へ行くとうまいそばが食べられる」と口込みで評判になっていった。標高400mの霧が多く、昼夜の気温差が15度のある山間地では米作りが出来ず、農家は蕎麦を栽培して主食代わりに食べるという習慣があった。宮古地区では、製粉は男衆、蕎麦打ちは女性の仕事で、そばは各家の味として伝承されてきた。またこの集落は越後浦街道にあるため、行商に來た人が逗留し、そばでもてなす習慣があった。

それに注目した山都町商工会では、昭和59年にムラおこし事業としてそばを活用した事業を開始、第1回「山都新そばまつり」を開催した。これを契機に、「山都そば」は知名度を高め、やがてブランド化して、そば耕作面積の拡大やそばを食する店の確保等、多様な取り組みがはじまった。

その後平成7年に「会津山都そば協会」が発足、商工会主導から町全体でそばを活用した地域振興を図っていく体制になった。協会の主催で各種そば祭りが開催され、さらに会員たちの日々の技術研修、そばの里にふさわしい美しい環境作り、おもてなしの向上等が積極的に行われてきた。山都そばは、上質の一番粉を繋ぎなしで打つため、白っぽくて透明感があるシコシコした歯ごたえが特徴である。会津山都そば協会では、一番粉を使う、繋ぎを一切使わない等を取り決めているが、さらに各店が特色作りに励んでいる。蕎麦店が一軒もなかった地域に、現在26軒の蕎麦店が開業。来町者は、他地区との競合や大震災の影響で、一時は低迷したが、昨年は健康食品としてそばが見直される等の影響



平成25年度
過疎地域自立活性化
優良事例



▲そばのふるさと宮古地域



▲平成10年から行っている「寒晒しそばまつり」



▲「素人そば打ち段位認定山都大会」の様子

「会津山都そば協会」 ●福島県喜多方市 「幻のそば」を食べるに年間12万人が訪れる里山

全国過疎問題シンポジウム 2014 in みえ

平成26年10月9日(木)～10日(金)
過疎地域の未来に向けたイノベーション
～つながり、持ち寄り、支え合う「ふるさと」～



開催日程
10/9 (木) 13:00～17:00 全体会
伊勢市 三重県営サンアリーナ
・過疎地域自立活性化優良事例表彰式
・基調講演 菅根原久司(NPO法人えがおつなげ
て代表理事)
・パネルディスカッション
コーディネーター/飯盛義徳(慶応義塾大学総合政
策学部教授) パネリスト/菅根原久司(前場)、尾
上武義(三重県大台町町長)、江崎貴久(旅館「海月」
女将他)、大和田順子((一社)ロハス・ビジネス・ア
ライアンス共同代表)、西村訓弘(三重大学副学長、
同大学地域戦略センター長)
・交流会18:00～20:00 鳥羽市・鳥羽国際ホテル
10/10 (分科会)
尾鷲市 三重県立熊野古道センター
・鳥羽市 答志コミュニティアリーナ
・大台町 健康ふれあい会館
・南伊勢町 町民文化会館
分科会では過疎地域自立活性化優良事例発表とパ
ネルディスカッション、現地視察が行われる。
問い合わせ/三重県地域連携南部地域活性化局
☎059-224-2195

編集後記

▼山林の手入れに、葡萄農家の繁忙期に、大勢のボランティアが駆けつけた。無償の労働を、心から楽しむかのように、過酷な作業を黙々とこなす参加者たち。彼らを突き動かしているものは、何なのだろう。暗いニュースの続く中、心が救われた取材だった。(K)
▼今回も素晴らしい人たちに沢山お会いした。自分の夢と地域の産物に付加価値をつけ地域ビジネスにした周防大島町の松嶋さん、柑橘農家の山本さん。奥矢作森林塾を運営する大島さんと棟梁。遠くから毎回やってくる塾生たちは、元氣な大島さんと仲間に会いたいからだという。広大な棚田を守る四ヶ村住民と保存会の人々。普段接する機会が少ない東京農大オホーツクキャンパスにも地域産業に関する膨大な研究データがあり、地域との連携を望んでいる。そして今も毎日思い出すのが、近づいてきて「また会いにおいで」と優しい眼差しを向けてくれた浦河牧場の馬たち。田舎は最高だと「でぼら」の取材を続けられる幸せを改めて噛みしめている(a)

De POLA No.44

【でぼら】2014年

発行日/平成26年10月5日
発行/全国過疎地域自立促進連盟
〒105-0001 東京都港区虎ノ門一丁目13番5号
第一天徳ビル3階
☎03-3580-3070 FAX03-3580-3602
http://www.kaso-net.or.jp/
編集/舎編集工房アド・エー

INFORMATION

新たに過疎地域に指定された市町村

今回の過疎法の改正により、平成22年国勢調査の結果に基づく過疎地域の要件が追加されました。これにより、新たな市町村が過疎地域に指定されました。

その追加要件として、

1. 人口要件

(1)45年間の人口要件

- ①昭和40年～平成22年の人口減少率が33%以上であること。
- ②昭和40年～平成22年の人口減少率が28%以上であり、かつ高齢者比率(65歳以上人口)が32%以上または若年者比率(15歳以上30歳未満人口)が12%以下であること。

ただし、昭和60年～平成22年の25年間で10%以上人口増加している市町村は除く。

(2)25年間基準

昭和60年～平成22年の人口減少率が19%以上であること。

2. 財力要件

平成22年度～平成24年度の3ヶ年に係る財力指数の平均が0.49以下であること。

その結果、新たな過疎市町村は次の通りです。

- ① 非過疎市町村で新たな過疎地域の要件に該当する市町村

- ② 一部過疎市町村で新たな過疎地域の要件に該当する市町村
- ③ みなし過疎市町村で新たな過疎地域の要件に該当する市町村

[北海道] ①富良野市、新篠津村、余市町、美幌町、白老町、厚真町 ②函館市、釧路市
[青森県] ②五戸市 ③つがる市
[岩手県] ②二戸市
[宮城県] ①気仙沼市、南三陸町
[秋田県] ①八郎潟町
[山形県] ①金山町
[福島県] ①平田村、小野町
[栃木県] ③那珂川町
[群馬県] ②中之条町
[千葉県] ①勝浦市
[石川県] ①羽咋市
[岐阜県] ③揖斐川町
[大阪府] ①千早赤阪村
[和歌山県] ①湯浅町、印南町
[岡山県] ②備前市
[広島県] ②府中市
[福岡県] ①香春町、赤村 ②みやま市
[長崎県] ①島原市
[宮崎県] ①都農町 ②日南市
[鹿児島県] ①枕崎市 ③指宿市
合計 ①22団体 ②9団体 ③4団体
平成26年4月1日現在の過疎関係市町村数は797市町村です。

平成25年度過疎地域自立活性化〔総務大臣賞〕受賞団体

昨年は過疎地域自立活性化の優良事例として、総務大臣賞を4団体、全国過疎地域自立促進連盟会長賞を6団体が受賞した。総務大臣賞を受賞した団体は次のとおり。

・新潟県十日町市/株式会社「あいポート仙田」
過疎と高齢化が著しい豪雪地域の仙田地区に危機感を持つ有志6人が発起人、16名が出資して平成22年に(株)あいポート仙田を設立した。高齢農家が営農が困難な時は会社が引き継ぐ、高齢世帯の雪下ろしや昼食の提供、JAやAコープの店舗の撤退に伴い、地区にミニスーパー、食堂、農産物直売所を開店する等、住民になくなくてはならない存在になっている。
古くから郷土芸能が盛んな東園目地区では、東京から「花祭り」を手伝いに来る若者らで祭りを継続してきたが、その中の4名が平成元年に廃校を借りて和太鼓集団を結成、今では20名の若者がターンして地区を支えている。平成22年に町内外の応援者と共に「NPO法人てほへ」

を立ち上げ、奥三河地区の風土や伝統文化の継承を中心に、「地域の暮らしお助け隊」等の日常活動にも力を入れている。

・島根県江津市/「ビジネスコンテスト」他
市は平成22年よりソーシャルビジネスの創業をめざす人材を誘致、発掘するため、「ビジネスプランコンテスト」(通称Go-con)を開催。これを契機に人材や若者の挑戦を支援する「NPO法人てごねっと石見」が設立された。商工会議所、信用金庫、市ら6機関で実行委員会が結成されて、ビジネスコンテストの運営、創業支援が行われている。

・徳島県神山町/NPO法人「グリーンバレー」
グリーンバレーでは集落内の古民家を都市のICT企業に貸し出す「サテライトオフィスパロジェクト」を開始、情報サービス企業等10社が開設された。光回線を使って高速インターネットを利用できるのが特色。地元企業との連携、雇用の創出もあり、地域再生の新たなモデルとして注目される。

*なお、全国過疎地域自立促進連盟[会長賞]を受けた団体は、本誌28-38頁で紹介しています。

[DePOLA] Back Number (近刊号)

No.36 ふるさとへ帰る！ Uターンした人の生活と意見



山を育てる「わにもっこ」山内さん(青森県大鰐町) 輪島の食文化と向き合う安原さん(石川県輪島市) 女性の感性を生かして「松波酒造」金七さん(石川県能登市) 有機農業「桜江オーガニックファーム」反田さん(島根県江津市) トマト栽培農家で自立・畑中さん(山口県阿東町) 故郷の巨大ガイド「つるぎの達人」兼西さん(徳島県つるぎ町) 資料館を「昔のふるさと」に・安部さん(広島県庄原市) いのちを繋ぐ有機農業・山下さん(高知県土佐町) 秘境の里の再生・轟さん(福岡県矢部村) 「プロステージ花番番」土井さん(秋田県鹿角市) 他

No.40 夢を紡ぐ——地域伝統のものづくり職人



大館曲げわっぱ(秋田県大館市・栗久) 南木曾「木地師の里」(長野県南木曾町・野原工芸) むらかみ町屋再生プロジェクト(新潟県村上) 三津谷煉瓦窯再生プロジェクト(福島県喜多方市) 伝統の切れ味、土佐打刃物(高知県香美市土佐山田町) からむし織の里(福島県昭和村) い草の育成とゴザ織り(熊本県八代市) 三好お札の里(徳島県三次市池田町) 縮れ穂栽培から、南部箒(岩手県九重村・高倉工芸) 秋山郷が紡ぐ、猫つぐら(長野県栄村) アイ文化を未来へ伝える(北海道平取町二風谷)

No.37 地域活性化のサポート隊



三宅村の農林漁業の再生に取り組む／東京都島しょ農林水産総合センター 心にも豊かな森林を／長野県林業大学校・木曾南部森林組合 和紙職人をめざす／島根県浜田市 地域医療の再生とまち創り「夕張希望の杜」 地域医療をプロ集団が担う／磐梯町保健医療福祉センター 水源の森を企業と地域で守る／福岡県朝倉市・東峰村 達人たちがガイドする熊野の豊饒な世界へ／紀南ツアーデザインセンター お父さんパワーを結集して竹林整備／奈良県宇陀市室生町 月山山麓に再現した山形県鶴岡市「庄内映画村」

No.41 これが自慢の味・風土・人——地域ブランド作戦



生いもこんにゃく NO.1(群馬県東吾妻町・小山農園) 450年の歴史を経て、西海えだおれなす(長崎県西海市) 飼料用米生産と「こめ育ち豚」(山形県遊佐町) 森を救う家具「ニシアワー」(岡山県西粟倉村) 京丹波の伝統作物(京都府京丹波町) 山里文化を語り継ぐ「遠野物語」の里(岩手県遠野市) 富良野ラベンダーの里(北海道中富良野町) 米蔵・しおまち唐琴通り・須恵器(岡山県瀬戸内市牛窓) 「森の香茸満ご膳」(佐賀市富士町) トキと暮らす郷(新潟県佐渡市)

No.38 進取の英知を未来へ——近代化遺産



◆北の大地に夢を拓いた北海道遺産／根釧台地の格子状防風林(根室地区) 稚内港北防波堤ドーム(稚内市) 佐賀家ニシン番屋(留萌市) ◆新時代を先取りした近代化施設／尻屋埵灯台と寒立馬(青森県東通村) 旧大湊水源池堰堤(青森県むつ市) 読書発電所・桃介橋(長野県南木曾町) 三角西港の石積埠頭(熊本県宇城市) 旧都築新地桶門他(熊本県八代市) 旧登米高等尋常小学校(宮城県登米市) 鑄造造船で近代化に挑戦(山口県萩市) 石見銀山・温泉津温泉(島根県大田市) 魚梁瀬森林鉄道(高知県馬路村他)

No.42 新たなコミュニティの実践——農山漁村の再生



中山間地域の住民をサポートする(高知県仁淀町・越知町・いの町) スキー場跡地に森林を復元(長野県長和町) 天草漁師の「ひと網オーナー制度」(熊本県天草市有明町) 油屋・万屋・車屋を地区で運営(広島県安芸高田市市川根) 「元氣かい! 集落応援プログラム」(和歌山県田辺市) 協力隊から起業・就職(北海道喜茂別町) 女子大OB生の田舎暮らし & 地域おこし(茨城県常陸太田市) おといねっぶ美術工芸高校(北海道音威子府村) 観葉植物栽培日本一(鹿児島県指宿市) 環境モデル都市(高知県橋原町)

No.39 交流・協働で地域を元気に



東京農大生の里山保全活動(福島県鮫川村) 「風の谷・森林の楽校」(岐阜県揖斐川町) 八木沢集落の地域おこし協力隊(秋田県上小阿仁村) 協力隊で山村生活を体験(岐阜県高山市) 栗島に住んで二年目・西畑さんの報告(新潟県粟島浦村) 「きみの定住を支援する会」(和歌山県紀美野町) 「ゆめ倶楽部21」「米作り塾」(和歌山県日高川町) お母さんの知恵袋「四季の里」(静岡県川根本町) おやきの里(長野県小川町) 大石田そば街道(山形県大石田町)

No.43 Uターンして新規就農——地域の農の新しい風



担い手を育成して地域活性化(大分県由布市庄内町、豊後大野市) 河岸段丘は命と恵みの大地(新潟県津南町) 「南郷トマト」の若い担い手(福島県南会津町) 農家の心意気をニューファーマーに(北海道士別市朝日地区) 自家製レモンで大三島リモンチェッコ(愛媛県今治市上浦) 「農業をする」という人生の作り方(岩手県西和賀町) 地域の産直市「お山の大将」(徳島県美波町) 休耕田にしない・親子で米作り(広島県庄原市総領) 昔の味を「げんたの野菜」(山梨県笛吹市芦川) 高原を彩るヒマラヤの青いケシ(長野県大鹿村) 環境未来都市しもかわ(北海道下川町)

★詳しい内容については <http://www.kaso-net.or.jp> を参照ください。残部が少ないため進呈出来ない号もあります。